

第26－27期日本学術会議会員情報

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
1	秋下 雅弘	東京大学大学院医学系研究科老年病学教授	臨床医学	・老年疾患の性差と性ホルモンの役割 ・高齢者の安全な薬物療法	老年医学を専門とし、大学において高齢社会に関する分野横断的な教育、研究を実施するとともに、日本医学会連合が行っているフレイル・ロコモ対策の中心を担っている。日本心臓財団高血圧と動脈硬化研究会優秀賞（2000年）、日本動脈硬化学会五島雄一郎賞（2010年）などの受賞歴がある。今後、日本社会が直面する高齢化社会の課題と解決に向けた活動などが期待される。また、過去に厚生労働省保険医療専門審査員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	会員または連携会員として、老化／老年医学という自分の専門領域に限らず、幅広く分科会活動に参画し、シンポジウムの企画や役割、意思の表出の作成などに関わりたいと考えている。	第二部
2	浅川 智恵子	IBMFellow／日本科学未来館館長／CarnegieMellonUniversityIBM特別功労教授	情報学	・視覚障害者のための移動支援技術の研究 ・情報アクセシビリティ ・音声及び触覚インタフェース	自身が視覚障害者でありながら、企業においてアクセシビリティに関する先駆的研究者として活躍し、また、2021年からは日本科学未来館館長として最先端の研究活動と一般市民をつなぐ活動を行い、学術と社会の多様性を率先して実現してきた。紫綬褒章(2013年)、National Investors Hall of Fame (2019年) などの受賞歴がある。また、過去に総務省ICT超高齢社会構想会議委員を務めた経験があるほか、現在国立国会図書館科学技術情報整備審議会委員であり、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	アクセシビリティ分野の専門知識および多様な立場と経験を活かして、DE&Iの実現を目指した学術会議の活動や、日本から世界に発信できるイノベーションの創出につながる活動に参画してまいります。	第三部
3	阿部 彩	東京都立大学人文社会学部人間社会学科教授	社会学	・剥夺指標を用いた貧困の測定とその動向の分析 ・子どもの貧困の分布・動向・影響と貧困政策の政策効果の分析	貧困・格差論を専門とし、とりわけ子ども政策・貧困問題などで顕著な業績を挙げてきた。海外経済協力基金（現国際協力銀行）、国立社会保障・人口問題研究所、内閣府（経済社会システム担当）など多彩な経歴を有しており、今後、政策提言や社会との結びつきにおいて重要な役割を果たすことが期待される。日経・経済図書文化賞（2008年）などの受賞歴がある。また、過去に厚生労働省社会保障審議会（生活保護基準部会）臨時委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	日本における社会政策分野におけるEBPMのために行政と学会の連携は不可欠であり、日本学術会議を通してその一助となるよう努めたいと思います。	第一部
4	有村 博紀	北海道大学大学院情報科学研究院教授	情報学	・大規模半構造・非構造データからのデータマイニングの研究 ・情報検索アルゴリズムのためのデータ構造とアルゴリズムの研究 ・実世界構造データを対象とした機械学習アルゴリズムの研究	情報知能学、情報基礎論を専門とし、これまでデータマイニング、情報検索アルゴリズムなどを研究し、情報学における幅広い分野からのトップ若手研究者の研究推進支援と育成に貢献するなどの活動を行ってきた。情報処理学会論文賞（2016年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	情報科学技術の急速な発展と社会的受容により、情報学の社会的期待が高まっています。その中で情報学委員会に参加し、学術・社会の協調的な発展に関して、次世代との橋渡しができるよう、微力ながら活動に参画したいと思います。	第三部
5	石原 一彰	名古屋大学大学院工学研究科有機・高分子化学専攻教授	化学	・元素戦略に基づくハロゲン触媒を用いる選択的酸化的カップリング反応の開発 ・環境低負荷型実用的エステル・アミド合成触媒の開発 ・高効率・高選択的反応を制御する酸・塩基複合触媒の開発 ・キラル鉄触媒を用いるエナントオ選択的光化学反応の開発	有機合成化学を専門とし、これまで環境に配慮した精密有機合成を指向した研究で、世界をリードしている。化学分野における社会貢献（SDGs、省エネルギー、環境問題など）に取り組む意欲があり、今後、化学分野だけでなく、環境分野での活動も期待される。文部科学大臣表彰「科学技術賞」（研究部門）（2017年）、日本化学会賞（2018年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	科学者として、また、教育に携わるものとして、日本における学術の発展及び普及活動に尽力したい。化学を専門としているので、特に化学分野における社会貢献（生活に密接に関連する化学の普及活動、SDGs、省エネルギー、省資源、環境問題など）に関して広く普及活動したい。	第三部
6	磯部 祥子	公益財団法人かずさDNA研究所先端研究開発部生物情報解析システム開発チームチーム長	農学、基礎生物学	・植物の全ゲノム配列解析 ・ゲノムワイドなDNA多型情報を用いた作物の選抜育種法の開発 ・ゲノムや遺伝子情報を格納するDBの開発およびデジタル技術を用いた植物形質評価法の開発	遺伝育種科学を専門とし、これまでゲノム生物学の手法を用いた優れた研究業績に加え、大量のデータに基づいて迅速な育種を行う「データ駆動型育種」のリーダーとして活躍する一方、分野横断的な人材交流、産業界と学術界の人材交流にも大きく貢献してきた。今後、食糧安全保障や地球環境の保全に係る社会課題などへの貢献が期待される。また、過去に内閣府総合科学技術・イノベーション会議重要課題戦略調査会農林水産戦略協議会構成員を務めた経験がある。	植物育種学、ゲノム科学ならびに農学に係る専門的知識や国内外のネットワークを活用し、食糧安全保障や地球環境の保全に係る社会課題を中心に、これらのテーマに関連する分科会や委員会等で審議といった日本学術会議の活動に参画してまいります。	第二部
7	依田 高典	京都大学大学院経済学研究科研究科長	経済学	・行動経済学のフィールド実験的研究 ・ダイナミックプライシングを用いた節電行動研究 ・異質介入効果の因果推論的研究	行動経済学、応用経済学を専門とし、電気工学者・制御工学者と協力をして節電行動の行動科学・実験科学的研究のプログラム代表を務めるなどの活動を行ってきた。節電行動を促すための政策手法の相対的有効性を比較した論文が高く評価されており、行動経済学会ヤフー優秀論文賞（2019年）などの受賞歴がある。また、現在消費者庁取引デジタルプラットフォーム官民協議会議長、同庁国際消費政策研究センター長、環境省日本版ナッジ・ユニット連絡会議有識者を務めている。	データ科学・行動科学の分野で、経済学と隣接諸科学の間の学際的研究を進め、これらのテーマに関連する分科会や委員会での審議といった日本学術会議の活動に参画してまいります。	第一部
8	市川 温子	東北大学大学院理学研究科教授	物理学	・ニュートリノ振動現象を通したニュートリノ混合の研究 ・ニュートリノを伴わない二重ベータ崩壊探索を通したニュートリノのマヨラナ性の研究	素粒子物理学を専門とし、ニュートリノ分野の研究者で、ニュートリノを用いたT2K実験のスパークスパーソンをつとめるなど、日本の高エネルギー物理学実験では初めての女性リーダーである。猿橋賞（2020年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	科学的知見にもとづいた判断が、国についても企業についてもますます必要になっています。日本学術会議が、学者の立場を守ることによって間接的にこれらの要請に寄与するとともに、知見を積極的に発信することで直接的に要請に応えられるような活動をしたいと思います。	第三部
9	伊藤 泰信	北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）先端科学技術研究科教授	地域研究、健康・生活科学	・企業実務へのエスノグラフィの応用可能性をめぐる実践的研究 ・医学教育・看護教育への文化人類学的視点の応用可能性をめぐる実践的研究 ・病院組織における医療情報および業務実践に関するエスノグラフィ研究 ・サービステデザイン視点を組み込んだ文化人類学・医療人類学の構想	文化人類学をベースに、ビジネス人類学やデザイン人類学を展開するとともに、科学技術イノベーション、医療政策などにも取り組んでいる。近年の新潮流である、現代社会の企業や医療、科学研究などさまざまな組織や活動を対象とするエスノグラフィを日本で実践している数少ない研究者である。科学技術社会論・柿内賢信記念賞実践賞（2017年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	社会の問題解決に寄与する学として文化人類学を鍛え直したいという展望をもち、文化人類学の視点や方法を実務に応用する分野横断的研究を実践してきました。企業や医療機関との共同研究や社会人（企業人・医療人）教育に従事してきた経験も活かしつつ、日本学術会議の諸活動に貢献したいと思います。	第一部
10	岩崎 博史	東京工業大学科学技術創成研究院細胞制御工学研究センター教授	基礎生物学、統合生物学	・相同組換えやDNA修復、ゲノムの安定維持機構の分子メカニズムに関する研究	遺伝学、分子生物学を専門とし、生物科学全般に幅の広い研究を展開している。日本遺伝学会の会長として、アジア、オーストラリア、ニュージーランドなどとの学術的な地域連携も積極的に進めており、今後、国際社会と連携する活動を期待できる。文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）（2013年）、日本遺伝学会木原賞（2016年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	生命科学の進展に貢献し、その成果を社会に還元するとともに、科学リテラシーの普及を目指します。また、日本の学術の国際的な地位向上に努めます。	第二部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
11	植木 朝子	同志社大学学長／文学部国文学科教授	言語・文学	・日本中世歌謡を中心とした古典芸能の歴史的背景や思想的基盤、文学的評価をめぐる研究 ・日本中世歌謡と他ジャンルの文学、絵画・意匠等との影響関係をめぐる研究 ・日本中世歌謡を中心とした古典芸能の近現代文学や芸術における享受に関する研究	日本の古代から近現代までの歌謡を専門とし、これまで文学のみならず歴史・民俗・芸能研究を含めた幅広い視野に立って、日本中世歌謡を中心とした古典芸能の歴史的背景や思想的基盤、文学的評価、近現代文学・芸術における享受に関する研究などの活動を行ってきた。2020年より女性初の同志社大学学長に就任した。日本歌謡学会志田延義賞（2002年）などの受賞歴がある。また、過去に経済団体連合会の産学連携推進分科会委員を務めた経験もある。	日本文学・芸能に関する専門的知識や国内外のネットワークを活用して、教育現場における文理横断の推進や教養教育の強化、ウエルビーイングといった社会課題を中心に、これらのテーマに関連する活動に参画してまいります。	第一部
12	臼井 恵美子	一橋大学経済研究所教授	経済学	・男性比率の高い分野（理工系や医療）での女性活躍に関する研究 ・少子化対策に関する研究 ・働き方と子育て両立に関する研究 ・中高年齢者の働き方とウエルビーイングに関する研究	労働経済学を専門とし、これまで男女の職域格差、中高年者の就業・引退行動、男女の働き方と子育ての分析などのアンケート調査に携わり、幅広く異分野の研究者が利用できる個票データの構築、政府統計の質問票の改訂などの活動を行ってきた。最近では、女性活躍推進の諸研究を学際的なメンバーを組織して実施し、若い女性の理系分野への進出を促進するための方策を立案するための研究活動を推進中である。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	労働経済学の分野、特に男女職域格差、働き方や子育ての両立、中高年者就業・引退行動などの調査や実証研究に取り組んできました。今までの研究成果と知見を活かして、学術的研究基盤の整備と拡充にも貢献し、人々のウエルビーイング向上に資する研究と活動に参画してまいります。	第一部
13	内田 誠一	九州大学大学院システム情報科学研究院教授	情報学	・画像情報学、特に文字画像の認識、分析、生成 ・実データ解析、特に様々な学術分野で収集・生成されるデータの解析	画像情報学を専門とし、パターン認識の専門家であり生命科学・医療情報学への応用でも優れた業績を挙げている。また、教育面でも数理・データサイエンス教育の陣頭指揮をとるなどの活動を行ってきた。文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）（2019年）、日本統計学会出版賞（2022年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	画像情報学や様々な実データ解析に関する専門的知識を活かし、日本学術会議における情報学に関する委員会や分科会での活動を通して、我が国の情報学の進展に寄与できるよう努力して参ります。	第三部
14	大越 和加	東北大学大学院農学研究科教授	食料科学	・水産有用貝類の貝殻に生息する多毛類の生物学的研究を通し、海洋の外来生物の侵入の実態と生物多様性や水産環境への影響について解明する。 ・自然撓乱、人為的撓乱が沿岸生態系に及ぼす変化と回復過程について解明する。 ・学術研究航海に参加し、極海の海洋生物の特性や深海の生物進化を支配する要因を解明する。	水産学・底生生物学を専門とし、水圏生産科学と生態学、環境学、多様性生物学、分類学等をつなぐ研究で優れた業績をあげている。これまで日本南極地域観測隊員として南極に滞在した経験や海の生物の生態等を、一般の人に分かりやすく説明する活動や、東日本大震災時の沿岸生態系の研究などの活動を行ってきた。東北大学総長教育賞（2017年）などの受賞歴がある。また、現在、農林水産省国立研究開発法人審議会委員を務めているほか、日本学術会議の第25期補欠会員であり、過去に連携会員としての活動実績もある。	水産学、海洋の底生生物学に係る専門的知識や国内外のネットワークを活用し、水産業に関わる多様で複雑な課題について、これらのテーマに関連する分科会や委員会での審議等の活動に参画してまいります。	第二部
15	大橋 幸泰	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	史学	・日本近世史(江戸時代)を専門とする。近世日本の宗教を材料に、近世人の秩序意識を研究している。これまで、クリシタン・隠し念仏・隠れ念仏などを研究対象としてきた。当該期の異端的宗教活動をめぐる問題から近世的邪正観を分析し、それを比較の対象としながら現代人を取り巻く常識や価値観について考えている。	日本史（近世史）を専門とし、大学院の博士課程在学中より、13年間、高等学校・中学校の教諭を務めた。歴史系の学協会連合である日本歴史学協会の常任委員を務めており、学協会との連携に寄与することができる。今後、教育の在り方などに実務経験を活かした貢献が期待される。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	学術の成果に基づき、世界で起こっている諸問題に対する意見を表明することは研究者の責務だと考えています。もし日本学術会議の活動に関わることを許していただけますならば、微力ながら力を尽くしたいと思います。	第一部
16	岡田 真里子	大阪大学蛋白質研究所教授	基礎生物学	・実験と数理情報科学手法の融合による細胞制御機構の解明 ・細胞内シグナル伝達ネットワークの数理モデル化研究 ・細胞モデリング計算ツールの開発 ・転写制御のバイオインフォマティクス解析および解析手法の開発	システム生物学を専門とし、生化学を背景とするが、実験と計算科学を組み合わせた研究を2000年頃より開始して、異分野融合を自ら実践し、多国籍の国際コンソーシアムや様々なプロジェクトを支援してきた。科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）（2018年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	これまで、生物学と情報科学を結ぶ学際的な研究分野において、国内外の研究者と協力し、研究を継続してきました。異なる学問分野の融合は、日本の科学研究の発展にとって今後ますます重要であると考えます。日本学術会議の活動では、このような点に貢献したいと思います。	第二部
17	岡村 康司	大阪大学医学系研究科教授	基礎医学、基礎生物学	・細胞膜、オルガネラ膜の電気化学連関機構を、イオンチャネルなどの膜タンパク質の構造活性相関の仕組みに立脚して解明する研究 ・ニューロンや筋などの興奮性細胞のホメオスタシス機構と老化の研究 ・電気化学信号の進化的変遷の理解	生理学を専門とし、細胞膜タンパクの構造と機能制御のしくみについて独創的な研究を展開するほか、分子生物学・生化学、構造生物学、計算科学等各界の専門家と協働し、国際的かつ学際的・分野横断的な先進研究を進めてきた。国際的にも高く評価されており、HFSP Grant 賞二回（1994年、2007年）などの受賞歴がある。現在IUPS（国際生理学連合）理事を務め、今後、国際間連携などが期待される。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	これまで行ってきた異分野連携や国際連携の経験を生かし、学問分野間の連携の促進と社会との対話を十分に進め、グローバルな問題の解決と国民の幸福にむけて尽力していく所存です。	第二部
18	奥田 真弘	大阪大学医学部附属病院教授／薬剤部長	薬学	・薬物の作用・体内動態制御因子の解明と個別化医療への応用 ・リアルワールドデータを活用したドラッグ・リポジショニング研究 ・新たな薬学的管理手法の開発と有用性評価	医療薬学を専門とし、薬学分野の中で社会との繋がりに最も関連する領域で優れた研究実績を有しており、これまで大学での教育・研究に加えて病院で実務にも携わり、日本医療薬学会会頭、日本病院薬剤師会副会長を務めるなどの活動を行ってきた。日本薬物動態学会DMPK賞（2009年）などの受賞歴がある。また、現在、厚生労働省医薬品等行政評価・監視委員会委員、文部科学省薬学系人材養成の在り方に関する検討会委員を務めるほか、第25期補欠会員であり、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	私は、日本学術会議法の趣旨を尊重し、第二部会所属の会員の立場からその活動に積極的に参画することにより、科学の振興、技術の発達、成果の活用、研究者の養成、行政への反映、社会への還元に努めます。	第二部
19	小口 高	東京大学空間情報科学研究センター教授	地球惑星科学、地域研究	・地形の分布と形態の分析や、地形を構成する物質の把握などに基づく地形の形成過程とその規定要因の解明 ・地理情報システム（GIS）を活用した地理学・地球科学の研究の実施と、GISに関する中等高等教育および市民教育のための教材と教育手法の開発 ・考古、防災、水質などと関連した自然と人間の相互関係の分析	地形学などの自然地理学を専門とし、これまで地理情報システム（GIS）の研究・教育への利用促進、自然と人間の関係などの異なる分野間の連携や政府の委員会での活躍、国際地形学会の副会長や国際学術誌の編集委員長、国内の3学会の学会長を歴任し、地理学コミュニティのまとめ役を担うなどの活動を行ってきた。IGU(国際地理学連合) COMLAND 賞（2008年）などの受賞歴がある。また、過去に国土地理院入札監視委員会委員長を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	22～25期の連携会員として、地球惑星科学委員会の分科会と小委員会の三役や委員として活動した実績を発展させ、日本の地球惑星科学や地理学の国際貢献、学術の市民への普及などに尽力したいと考えております。	第三部
20	奥野 恭史	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻ビッグデータ医科学分野教授	薬学	・スーパーコンピュータ「京」や「富岳」を用いた分子シミュレーションによる創薬・ゲノム医療への応用研究 ・創薬ターゲット分子探索やリード化合物探索・最適化のための創薬AI技術の研究開発 ・健康・医療ビッグデータを用いた疾患発症予測と予防のための医療AI技術の研究開発	薬学・医学における計算科学・データサイエンスの研究を先駆的に推進し、特に、スーパーコンピュータ「京」や「富岳」を用いた創薬シミュレーションの重点課題・研究代表者として当該分野を牽引してきた。また、AI創薬の産学連携コンソーシアムを設立し、人材の育成やAI技術の現場実装に取り組んできた。日本オープンイノベーション大賞厚生労働大臣賞（2020年）、文部科学大臣表彰科学技術賞（科学技術振興部門）（2009年）などの受賞歴がある。また、現在文部科学省科学技術・学術審議会専門委員を務めている。	薬学・医学・生命科学とデータサイエンス・シミュレーション科学の異分野融合におけるこれまでの自身の経験を軸に、異分野連携による新たな学際領域の促進に資することで、我が国の学術のさらなる発展に貢献したい。	第二部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
21	奥村 幸子	日本女子大学理学部数物情報科学科教授	物理学	・銀河同士が接近することで生じる相互作用や合体がその後の星形成や銀河中心核の活動性に及ぼす影響についての観測的研究。 ・新たな技術や手法を用いた電波観測システムの高性能化・高精度化。	電波天文学を専門とし、観測およびデジタル関連器など装置開発の双方で高い学術的業績を有しており、男女共同参画、若手キャリアパス等の問題に関心も深い。また、天文学の国際プロジェクト「ALMA」に日本から参加し、アジア地域センターマネージャーを務めた。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	日本学術会議の活動は、日本社会の現状ならびに未来に対して大きく資するものであると考えます。そのための活動に積極的に参画し、人材育成含め日本の未来を拓くお手伝いができれば幸いです。	第三部
22	小田中 直樹	東北大学大学院経済学研究科教授	史学、経済学	・近代フランス農村部における社会経済政治構造の特質の解明 ・戦後フランス地方都市における都市化、都市問題、都市政策の展開過程および特質の解明 ・歴史関連諸科学（歴史理論、歴史学方法論、史学史、歴史教育理論など）	専門はヨーロッパ史（近現代フランス社会経済史）・歴史理論だが、史学理論に通曉し、史学分野の国際協力に尽力する一方で、経済学の合理的選択論について一般向け解説書を執筆などの活動を行ってきた。今後、多方面の学術分野をつなぐ役割を期待できる。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	わが国を代表するナショナル・アカデミーである日本学術会議において、政府・国家・経済などから独立した「科学」あるいは「科学者」の観点から、科学技術政策について提言をおこなうとともに、世界の科学界において他国のナショナル・アカデミーと協力することに貢献したいと考えている。	第一部
23	越智 敏裕	上智大学法科大学院教授／弁護士	法学	・行政訴訟理論（特に訴訟要件論） ・まちづくり・都市法（景観、人口急減と地方活性化、再生可能エネルギーなど政策論を含む） ・文化法（歴史的建造物その他の文化財保護、文化芸術と法など、文化遺産にかかる政策論を含む）	日米の環境訴訟・環境法政策を主な研究対象としているが、環境分野にとどまらず、行政訴訟制度の研究や一般民事・刑事事件を含む訴訟経験を持つ法実務家（弁護士）でもある。日本弁護士連合会の行政問題対応センターの委員や法務省が設置した行政事件訴訟改革に係る検証研究会の委員などの経験があり、司法改革等社会課題の解決に関する知見が豊富である。また、文筆家でもあり、日経小説大賞（2017年）などの受賞歴がある。	環境法・行政法学、特にまちづくり・文化財分野の専門的知見と法曹実務経験等を活かし、人口急減国家・日本が抱える諸問題に関連する分科会の審議など日本学術会議の活動に、人材育成も視野に入れ、参画して参ります。	第一部
24	小畑 郁	名古屋大学大学院法学研究科教授	法学	・国際法の歴史、とくに外国人法―国家責任―外交的保護の法制度の歴史的展開 ・人権の国際的保障、とくにヨーロッパ人権保障制度および国連の人権保障制度 ・日本の国家性の国際法的文脈、とくに占領期における国際法と国家法の関係に関する諸理論	国際法（国際組織法、国際人権法）を専門とし、これまで、国連人権理事会諮問委員会などの国際機関や国際法協会などで委員を務め、さらには、アジア諸国の大学および日本の法務省、文部科学省、JICA（国際協力機構）等と連携して、人材育成を中心とした法整備支援事業に長年取り組むなどの活動を行ってきた。今後、異なる専門分野や実務家との間の連携、国際連携の一層の推進などが期待される。	法学に係る専門的知識や国内外のネットワークを活用し、人権が尊重・確保される社会の構築といった課題を中心に、これらのテーマに関連する分科会や委員会での審議や国際連携の推進といった日本学術会議の活動に参画してまいります。	第一部
25	加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科医の倫理と公共政策学分野教授	基礎医学、健康・生活科学	・医学研究の倫理的課題に関する研究 ・ヒトゲノム解析や幹細胞研究、AIの医療実装などの先端生命・医科学分野の倫理的・社会的課題やガバナンスに関する研究 ・医学研究への患者の主体的参画のあり方に関する研究	発生物学で学位を取得した後、生命倫理の分野で活躍中である。広く生命科学技術を見渡し、社会における利用のあり方について議論し、日本における生命倫理政策の策定に関わるだけでなく、世界保健機関（WHO）専門家委員会専門委員として報告書の作成に携わるなど国際的にも活動してきた。また、過去に内閣府総合科学技術・イノベーション会議専門委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	生命科学の実験研究に約10年間携わった後、人文学や社会医学などで約30年間、生命科学・医学の倫理とガバナンスの研究と国際的活動を行ってきた実績と経験を活かし、分野横断的・国際的活動に関して貢献したい。	第二部
26	加藤 一実	国立研究開発法人産業技術総合研究所理事	材料工学、化学	・前駆体構造制御による高機能性ナノ材料の集積化研究 ・溶液化学に基づく強誘電体薄膜およびナノキューブのデバイス化研究 ・両親媒性化合物を利用した多孔質半導体薄膜の構造制御と機能評価の研究	強誘電体薄膜や多孔質半導体薄膜などの高機能ナノセラミックス材料を溶液から合成する高度なセラミックスプロセスを専門とする研究者である。その実力は国内外から高く評価されており、米国セラミックス協会フェロー（2016年）、応用物理学会フェロー（2021年）などの受賞歴がある。また、現在総務省公害等調整委員会委員であり、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	科学技術の一層の発展を通して、世界規模で健全で多様な産業技術を持続的に発展させるため、アカデミアの研究者と産業界の技術者が高度な専門的知識や先端技術に関する知見の共有を可能にする、協奏的で循環型の仕組み作りが緊要である。人材育成および人財流動に基づくイノベーション・エコシステムの構築と運営に貢献したい。	第三部
27	河原 純一郎	北海道大学大学院文学研究院教授	心理学・教育学	・注意の認知心理学。同時に複数の作業をすることで起こるエラーや見落としの原因解明と困難低減法の開発。 ・魅力の認知心理学。顔や物品の魅力を規定する要因を認知心理学の立場から調べる。 ・応用認知行動科学。心理学や周辺領域の知見を日常行動や生活に活用するとともに、逆に問題発見のためにとり入れて探求する。	認知科学を専門とし、これまで基礎研究のみならず、交通安全や消費者行動や交通安全に関し、自動車運転安全センターや消費者庁と連携して社会とつながる活動に注力してきた。日本心理学会国際賞奨励賞（2009年）、日本基礎心理学会優秀論文賞（2013年）などの受賞歴がある。今後、認知科学が産業応用につながる研究に従事した経験を活かして具体的な社会課題への貢献などが期待される。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	心理学関連の分科会では比較的遠めの目標と、直近で実現可能な目標があってもよいように思います。そのうち後者について特に心理学を学んだ人たちがその知識と技能を社会で活用できる環境の整備に努力したいと思います。	第一部
28	木村 直子	山形大学学術研究院教授（農学部主担当）／岩手大学大学院連合農学研究科教授（併任）	食料科学	・哺乳類の卵胞形成と維持、卵胞発育過程の分子機構の解明とそれらの制御に関する研究 ・哺乳類の産仔生産能を高める卵子/受精卵の品質改善に関する研究 ・哺乳類雌の生殖能に及ぼす環境因子に関する研究	動物生殖科学を専門とし、食品企業での勤務経験がある。家畜の増殖のみならず、ヒトの生殖補助医療領域にも貢献する研究業績をあげている。さらに、環境汚染物質による生殖毒性の知見も有している。これまで山形県ほか東北地域の畜産振興に貢献するとともに、高病原性鳥インフルエンザなどの伝染病統御に重要な役割を果たしてきた。世界体外受精会議記念賞（2010年、2011年）などの受賞歴がある。また、現在農林水産省食料・農業・農村政策審議会臨時委員を務めているほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	畜産学、応用動物科学を基盤とする専門知識と関連する学協会、産業界との繋がりを活用し、畜産物の安定確保と環境保全、スマート畜産、遺伝子編集家畜、動物福祉など関連産業の発展に資する諸課題の学術基盤の充実やハーモナイゼーション支援などについて、関連分科会や委員会で審議し、国民への情報発信を行い、日本学術会議の活動に参画してまいります。	第二部
29	熊谷 晋一郎	東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野准教授	健康・生活科学	・当事者参加型の自閉スペクトラム症研究 ・当事者研究を活用した学術の共同創造に関する研究 ・STEM分野の教育研究環境のアクセシビリティ向上に関する研究	臨床小児科医だが、大学病院のみならず一般医療機関における実務経験を有する経験を活かして、多様な当事者研究を推進し、認知科学やロボット工学など分野横断的に仮説検証を進めてきた。新潮ドキュメント賞（2010年）などの受賞歴がある。今後、学術会議が「国民・社会との対話」を実践する上でキーパーソンとなり得ることが期待される。また、過去に内閣府障害者政策委員会委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	マイノリティを含む多様な市民の経験やニーズと乖離しない学術の推進を実現するために、当事者研究の知見の基づいた研究の共同創造を実装するとともに、科学者コミュニティの多様性・公平性・包摂を実現すべく尽力したいと考えております。	第二部
30	倉本 圭	北海道大学大学院理学研究院教授	地球惑星科学	・地球を含む惑星・衛星の形成と分化、惑星原物質の起源、惑星表層環境の進化等に関する研究 ・JAXAの主導する火星衛星探査計画MMXの主任研究者として、初期太陽系における生命生存可能惑星の形成過程に迫る本計画の科学面をリード	JAXA／宇宙科学研究所宇宙理科学委員会委員長として我が国の惑星探査計画を取りまとめ、理学と工学の橋渡し役を果たした。また、JAXAが主導する火星衛星探査計画の主任研究者として日米欧の密接な連携を推進しており、今後国際学術連携の中核を担う人材として期待される。日本気象学会堀内賞（2005年）などの受賞歴がある。また、過去に内閣府宇宙政策委員会宇宙科学・探査小委員会委員を務めた経験があるほか、現在文部科学省科学技術・学術審議会国際宇宙ステーション・国際宇宙探査小委員会委員である。	惑星科学という学際分野の一つに属して研究教育活動を行ってきました。これまでの学際的研究、将来計画の提案、理工連携による探査プロジェクトの推進、社会への成果発信といった経験を生かして、日本学術会議の活動に貢献したいと思います。	第三部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
31	黒橋 禎夫	大学共同利用機関法人国立情報学研究所所長／ 京都大学大学院情報学研究科特定教授	情報学	・日本語テキスト解析のための統合的言語資源構築に関する研究 ・日中・中日機械翻訳の実用化に関する研究開発 ・知識に基づく構造的言語処理の確立と知識インフラの構築、およびその医療テキスト構造化への応用	自然言語処理を専門とし、生成系AIについても造詣が深い。これまで情報学の研究推進および我が国における学術情報基盤の構築・運用を主導してきた。文部科学大臣表彰(科学技術賞・研究部門)(2017年)などの受賞歴がある。また、過去に文部科学省研究振興局科学官を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	2023年4月から国立情報学研究所長に就任し、情報学の研究推進および我が国における学術情報基盤の構築・運用を主導する。特に後者においては研究機関、研究者との協業が重要であり、学術会議での活動を通してこれを加速したい。	第三部
32	河野 哲也	立教大学文学部教育学科教授	哲学、環境学	・心の諸科学の科学哲学 ・環境哲学・環境倫理学 ・教育哲学、道德教育、子どものための哲学	環境哲学・科学哲学を専門とし、これまで環境や教育など現代社会の様々な問題を論じるとともに、非専門家との哲学的対話を実践してきた。また日本哲学系諸学会連合(JFPS)の事務局を担当するとともに、世界哲学会(FISP)との連絡係を務めている。防衛大学校学術・教育振興会山崎奨励賞(2000年)などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	環境哲学・科学哲学の立場から、現代社会の重要課題を哲学対話を通して市民と議論しながら、今後のあるべき持続可能な社会の全体像とそこへの学問の貢献、初等中等学校での教育方法を考案し、政府・地域社会に提言していきたい。	第一部
33	越塚 誠一	東京大学大学院工学系研究科システム創成学専攻教授	総合工学、機械工学	・数値流体力学、粒子法、V&Vに関する研究 ・原子炉工学、原子炉設計、原子力安全に関する研究 ・流体力学、伝熱、混相流に関する研究	計算科学、原子力工学を専門とし、これまで内閣官房の「東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会」の事故原因等調査チーム長、日本電気協会の原子力規格委員会委員長を務め、研究成果の大学発ベンチャーを通じた実用化に取り組むなどの活動を行ってきた。科学技術振興機構大学発ベンチャー表彰文部科学大臣賞(2014年)などの受賞歴がある。また、現在原子力規制委員会国立研究開発法人審議会会長を務めており、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	これまで、計算科学シミュレーションと工学設計分科会および原子力安全に関する分科会において、関連学協会の協力を得ながら、公開シンポジウムや意思の表出などに参画してきた。今後は分野横断的な要素を加えダイバーシティにも配慮して活動したい。	第三部
34	小園 英雄	早稲田大学理工学術院教授／東北大学数理科学共創社会センター教授	数理科学	・非線形偏微分方程式の数理解析、特にナビエ・ストークス方程式、オイラー方程式を中心とする非圧縮性粘性流体の基礎方程式の数学的理論の構築。研究手法は、偏微分方程式論、関数解析学、調和解析学を主体とする近代数学解析による。	数理解析学を専門とし、流体力学の数学解析研究の世界的権威であり、これまで日本数学会の理事長を2期務めて数学教育・数学研究の指導者の立場にあり、国際数学連合(International Mathematical Union)の我が国の代表の立場から活発な国際展開を図り、世界的存在感の向上に寄与するなどの活動を行ってきた。フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞(2002年)、文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)(2016年)などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	数学、数理科学に従事する教育者・研究者として、日本の科学技術の発展に貢献をしたい。これまでに得た学問的な知見を基礎に、我が国の科学政策に専門家の見地から提言を行う日本学術会議の一員として役に立ちたい。	第三部
35	後藤 英司	千葉大学大学院園芸学研究院教授	農学、食料科学	・施設園芸温室・植物工場における生育環境制御 ゼロエネルギー/ゼロエミッション温室の開発 ・農業気象・環境学と農地生態系の資源循環 農山漁村における再生可能エネルギーの導入促進 ・人工環境下の植物生態生理学 バイオエンジニアリング ・高付加価値植物の作出および生産システムの開発 遺伝子組換え植物を用いた医薬品原材料の生産	農業環境工学および農業情報工学を専門とし、これまで農業環境工学分野の先端的研究を推進しているだけではなく、農学全般に係わる専門的知識、産学官の協働経験、国内外の人的ネットワークを活かして、温暖化防止と持続的食料生産に係わる社会的課題にも取り組んできた。日本生物環境工学会学術賞(2012年)、日本農業工学会賞(2019年)などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	農学に係わる専門的知識とその国内外のネットワークおよび産学官の活動経験を活かして、温暖化防止と食料生産に係わる社会的課題を中心に、これらのテーマに関連する分科会や委員会での審議といった日本学術会議の活動に参画してまいります。	第二部
36	櫻井 博儀	国立研究開発法人理化学研究所・仁科加速器科学研究センターセンター長	物理学	・不安定核ビームを用いた核構造・核反応研究 ・高レベル放射性廃棄物の処理に関する研究開発	原子核物理学を専門とし、これまで核構造・核反応研究、高レベル放射性廃棄物の処理に関する研究開発などの活動を行ってきた。仁科記念賞(2015年)などの受賞歴がある。また、過去に内閣府原子力委員会専門委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	専門的な視点とこれまでの経験や人的ネットワークを縦軸にし、他の専門分野の研究者との横の連携や協働を通して、日本の科学技術の発展に寄与する。	第三部
37	佐古 和恵	早稲田大学理工学術院教授	情報学、電気電子工学	・無記名電子投票に関する研究 ・公平性が検証可能な電子抽選システムに関する研究 ・匿名認証技術に関する研究ならびに標準化作成 ・分散型台帳に関する研究 ・デジタルアイデンティティに関する研究	情報セキュリティ分野を専門とし、特に暗号の理論的研究で優れた業績を挙げ、また、ISOの標準化活動にも長く携わってきた。民間企業で長く研究職を務めており、今後、産業界との連携が期待される。テレコム先端技術研究支援センター会長賞(2021年)などの受賞歴がある。また、現在、内閣府新技術等効果評価委員会委員、金融庁金融審議会委員を務めているほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	私自身の民間企業研究者としての経験や、一般社団法人での代表としての活動、日々の学生との対話から得られたものを通じて、わが国の研究者間のコンセンサス形成と市民社会との対話に微力ながら貢献したい。	第三部
38	笹木 圭子	九州大学大学院工学研究院教授	総合工学、化学	・ジオミメティクスを活用した環境材料・環境技術のデザイン ・ナノジオサイエンスにもとづくバイオハイδροメタラジー	環境材料およびリサイクル技術を専門とし、これまで大学において工学と農学の融合を推進し、資源・素材学会の会長を務めるなどの活動を行っている。海外においても資源研究の分野で高い評価を受けており、特に、アフリカとの国際連携において強みを持っている。資源・素材学会論文賞(2009年)などの受賞歴がある。また、過去に環境省中央環境審議会委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	日本学術会議においては、材料工学委員会・環境学委員会・総合工学委員会の委員と連携しながら、非資源国であるわが国が環境負荷を抑制しながら資源およびエネルギー供給を維持するための社会的しくみや科学技術を発展させる学術のあり方を提案をしていきたい。	第三部
39	佐々木 園	京都工芸繊維大学繊維学系教授	化学	・放射光を利用した生分解性ポリマー／バイオベースポリマー薄膜の構造・物性研究 ・日本沿岸の海水による海洋分解性ポリエステル薄膜のミクロな分解に関わる構造・物性研究 ・結晶性高分子の薄膜での結晶化挙動とその膜厚依存性	高分子化学を専門とし、これまで放射光を利用した生分解性ポリマーなどの高分子材料の構造解析、階層構造評価法の構築、国際結晶学会(IUCr)との連携などの活動を行ってきた。高分子学会Polymer Journal論文賞(1999年)などの受賞歴がある。また、過去に経済産業省化学物質審議会臨時委員を務めた経験があるほか、現在、第25期補欠会員であり、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	高分子材料科学・結晶学・放射光構造科学に係る専門的知識や国内外のネットワークを活用し、高分子化学、結晶学、カーボンニュートラルや環境科学に関連する分科会や委員会での審議、そしてSDGsや人材育成といった日本学術会議の活動に参画して参ります。	第三部
40	佐田 豊	株式会社東芝執行役上席常務CTO	機械工学、総合工学	・画像処理を用いた流体の3次元計測法の研究 ・電子機器の冷却技術に関わる研究	熱工学、流体工学を専門とし日本機械学会論文賞(1995年)などの受賞歴がある。企業の国内外の研究所長、役員の職務を通じ、広範囲にわたる社会のニーズや技術の動向に精通しており、高い国際的なコミュニケーション能力を有する。また、過去に経済産業省超長期エネルギー技術研究会・超長期エネルギー技術戦略研究会委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もあり、今後とも産業界の立場から積極的に活動に参加することが期待される。	大学、大学院で学んだ後、企業の研究開発経験を通じて感じている日本の工学学術領域の課題、深刻な社会課題の解決へ貢献する工学のあり方を、学術会議会員各位と議論しながら、具体化して政策や施策の提言へつなげたい。	第三部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
41	定延 利之	京都大学大学院文学研究科教授	言語・文学	・コミュニケーションの中での言語の規則性解明 ・話芸（話すスキル）の調査研究 ・認知と文法の関係解明	言語学を専門とし、言語とコミュニケーションに関わる問題を広い視点から解決する能力を有しており、これまで日本語を流暢に話せない外国人等の非流暢の実態などについて、データベースや音声合成等の研究者、あるいは多国籍の言語学研究者とともに、研究と解決策の検討などの活動を行ってきた。今後、将来の日本が多文化共生社会として十全に機能するために、科学の立場から重要な役割を担うことなどが期待される。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	言語とコミュニケーションに関する研究を通じて、私がこれまでに蓄えてきた知見を、持続可能で安全な社会、人間性が尊重される豊かで幸福な社会を構築するために、活かし役立てていければと考えています。	第一部
42	澤田 康幸	東京大学大学院経済学研究科教授	経済学、地域研究	・開発経済学分野における、ミクロ実証・実験研究・マクロ実証研究 ・マイクロデータ、フィールド実験データ、ビッグデータを用いた政策評価研究 ・自然災害・人的災害に関する経済学的研究	開発経済学・国際経済学・応用ミクロ計量経済学を専門とし、これまで開発途上国における貧困削減や教育開発をテーマに一連の研究を行い、英文査読付きジャーナルに膨大な数の論文を公刊してきた。また、研究成果を現実の途上国の開発に生かすために、アジア開発銀行チーフエコノミストを務めるなど、開発政策の策定やその評価などに積極的に関わってきた。日本経済学会石川賞（2011年）、日経・経済図書文化賞（2013年）などの受賞歴があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	新型コロナウイルス感染症やロシアのウクライナ侵攻による悪影響から復興し、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向け、日本を代表する学術会議のメンバーとして学界とより広く一般社会にいくばくかの貢献ができればと考えている。	第一部
43	斯波 真理子	大阪医科薬科大学循環器センター特務教授	臨床医学、薬学	・家族性高コレステロール血症の病態解析、遺伝子解析、ガイドライン作成 ・脂質異常症等の難病を対象とした核酸医薬の開発 ・原発性脂質異常症に関する疫学研究、診療体制構築、普及啓発 ・動脈硬化の発症、進展に関わる因子の解析	代謝および内分泌学を専門とし、これまで家族性高コレステロール血症をテーマとして、基礎研究、臨床研究、診療（ガイドライン作成含む）、患者会活動、一般市民への啓発、さらには新薬開発まで、薬学、工学との共同研究、国際共同研究を含め、極めて幅広い活動を精力的に行ってきた。滋賀医科大学湖医会賞（2015年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	脂質異常症難病の基礎研究および臨床研究、創薬研究のバックグラウンドを基盤として、将来の医学、薬学研究に貢献するべく、これらのテーマに関する審議やさらに広い分野での活動に参画して参ります。	第二部
44	島岡 まな	大阪大学法学研究科教授／副学長	法学	・110年以上前の家父長制時代に成立した日本の刑法典を解釈する刑法学にジェンダー視点を取り入れるための研究 ・女性に対する暴力根絶のための刑法学的アプローチによる研究 ・フランス刑法一般（差別罪、セクハラ罪を含む性犯罪、反セクト〈カルト〉法等）に関する研究	刑事法を専門とし、加えてジェンダー法、フランス法に通暁している。これまで国際学会（国際刑法学会等）での活動の他、日本弁護士連合会との共同研究、勤務先である大阪大学ダイバーシティ&インクルージョン（D&I）推進担当副学長としての活動などを行ってきた。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	ジェンダー及びフランス刑法に係る専門知識を活用し、日本学術会議の委員会や分科会での審議・意見表出等を通して、「女性に対する暴力」やLGBTIの権利保障等に係る課題解決に向けて、誠心誠意努力してまいります。	第一部
45	嶋田 洋徳	早稲田大学人間科学学術院教授	心理学・教育学	・児童青年期から成人期を対象とした心身の不適応問題に対するストレスマネジメントの体系化と実践に関する研究 ・非行犯罪処遇場面における再犯再非行防止に対する認知行動療法プログラムの体系化と実践に関する研究 ・心身の不適応問題の危険因子になる認知的情報処理と生活環境要因との相互作用に関する基礎的研究	臨床心理学を専門とし、日本心理医療諸学会連合や日本心理研修センター等での活動実績があり、これまで応用健康科学、司法領域での公認心理師の向上に向けて中心的な役割を果たしてきた。日本行動療法学会内山記念賞（2004年）などの受賞歴がある。今後、臨床心理学の幅広い領域の実務家と他の学問領域をつなぐことが期待される。また、法務省性犯罪者に対する再犯防止プログラム検討会座長及び厚生労働省公認心理師の多様な活躍につながる人材育成の在り方に資する調査検討委員会委員等を務めてきた。	人間の心身の健康に関する様々な社会的課題に対して、臨床心理学や健康科学、特にエビデンスに基づく認知行動療法の枠組みから取り組むべく、関連する委員会等の議論等、日本学術会議の活動に参画してまいります。	第一部
46	島村 健	神戸大学大学院法学研究科教授	法学、環境学	・環境責任：環境保護措置をとるべき責任・費用負担責任の法的基礎づけについて研究してきた。 ・環境政策手法論：環境政策の様々な手法を対象として、その法的限界、法的根拠づけについて研究してきた。 ・気候変動政策：日本の近時の気候変動政策について、環境法学の観点から分析・評価を行ってきた。	行政法を専門とし、中でも環境分野の法と政策を主たる研究対象とする。これまで環境責任をはじめ理論研究においても優れた研究・業績を有するとともに、訴訟事件への意見・助言の提供や判決例の研究などを法実務家とともに行う。農業法学会にも所属し、漁業資源管理の共同研究に参加するなど、自然資源管理に関する学際研究の経験と知見がある。今後、カーボンニュートラル実現のための移行（transition）を支える法政策に関する活動への貢献などが期待される。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	私が専門とする環境法の分野では、2050年のカーボンニュートラル目標への移行のあり方が法政策上の重要な課題となっており、この問題に学問の側から貢献するには、学際的な研究が必要不可欠です。様々な分野の研究者による共同研究・提言活動ができる場づくりに努めたいと思います。	第一部
47	下田 吉之	大阪大学大学院工学研究科教授	土木工学・建築学、環境学	・民生部門を中心とした国土・都市のエネルギー需要予測モデルの開発と温暖化政策評価に関する研究 ・建築・都市エネルギーシステムのシミュレーション・データ分析技術活用による最適化・効率化に関する研究 ・スマートコミュニティなど環境調和型まちづくりの計画手法に関する研究	建築環境学・建築設備関連、地球資源工学、エネルギー工学を専門とし、環境政策、環境配慮型社会関連に造詣が深い。都市・建築分野における最終エネルギー需要予測モデルの開発をはじめ、カーボンニュートラル関係の研究を長年実施し、IPCCの報告書で研究成果が引用されている。日本建築学会賞（論文）（2020年）などの受賞歴がある。また、現在中央環境審議会地球環境部会臨時委員であり、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	建築・都市の分野を中心に、カーボンニュートラル社会の達成に向けて日本の研究が世界に貢献していくよう、関係学術分野の更なる活性化に向け、関連する分科会等での審議等、日本学術会議の活動に参画して参ります。	第三部
48	城山 英明	東京大学大学院法学政治学研究科教授	政治学	・国際行政論：国際通信・交通、国際援助、国際保健、環境、エネルギー等様々な分野における国際行政に関する研究 ・科学技術と公共政策：科学技術に関わるリスク規制、技術導入プロセスや社会の移行管理に焦点を当てた研究 ・政策過程論：国内的国際的政策形成、合意形成等に関する研究	国際行政学と科学技術政策を専門とし、この分野の第一人者である。これまで日本学術振興会の学際的プロジェクトの運営や大学において学際的なセンターの運営を主導し、分野横断的なプロジェクトの構築、運営に携わるなどの活動を行ってきた。日本ITU協会賞国際活動奨励賞（2001年）などの受賞歴がある。また、過去に科学技術・学術審議会臨時委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	政治学分野において行政学を中心に関連分野と連携し、その成果を社会的に発信することに努めたい。特に、複合的リスクへの対応や先端技術のガバナンスに関して科学技術分野と社会科学分野の連携を進めたい。	第一部
49	杉本 慶子	国立研究開発法人理化学研究所環境資源科学研究センターチームリーダー	基礎生物学	・植物の再生を制御する分子機構の解明 ・植物の細胞増殖、分化を制御する分子機構の解明	植物科学全般を専門とし、分子生物学から形態学まで幅の広い研究を展開している。これまで海外研究機関、国立大学、国立開発法人など多様な職場を経験しており、EMBO（欧州分子生物学機構）associate member（外国人会員）を務めている。木原記念財団学術賞（2022年）などの受賞歴がある。今後、国際的な視野で社会と連携する活動などが期待される。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	植物科学分野の専門知識や国内外のネットワークを活用し、持続的な環境資源の活用や、社会との連携、日本の科学社会のさらなる国際化を目指す分科会活動に参画し、日本学術会議の活動に貢献して参ります。	第二部
50	杉山 淳司	京都大学大学院農学研究科教授	農学	初めてセルロース分子を電子顕微鏡で可視化し、結晶構造や生合成を研究。近年は、樹木に特有な、多様かつ緻密な「かたち」を先端的な情報処理技術で解析し、樹木の構造的な最適化のメカニズムや、樹種特性の理解を深める研究に従事。また、文化財の木製品等の解析・調査を通して、伝統技術の科学的解明に携わる。	木質科学を専門とし、これまでポストナノセルロース、木質建造物や都市の木質化、環境問題とバランスを取りながら木質資源を循環利用するシステムの構築などに取り組んできた。日本農学賞・読売農学賞（2019年）、紫綬褒章（2020年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	「木の文化」を支える伝統技術の継承に不可欠な科学的解析の集約、およびリグノセルロース新素材研究、都市の木質化、環境問題とバランスのとれた木材の生産と利用など、カーボンニュートラルを目指す上でメリットの大きい木質資源利用の推進。	第二部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
51	杉山 直	東海国立大学機構副機構長／名古屋大学総長	物理学	・ビッグバンと宇宙マイクロ波背景放射の研究、特に宇宙マイクロ波背景放射の温度揺らぎ生成の物理過程解明に関する研究 ・ダークマター、ダークエネルギーに関する研究、特に観測量に基づき各々の存在量を制限する研究 ・宇宙最初期星形成に関する研究、特にその時期の解明と最初期星が周囲のガスに及ぼす影響の研究	専門は天文学であり、宇宙線背景放射についての理論研究で国際的に高く評価されている研究者であるが、教育者としても抜群の実績を残し、現在は大学学長として、我が国大学システムが直面する複雑な問題に取り組んでおり、今後、幅広い視点から多くの有意義・貴重な助言が期待される。日本天文学会林忠四郎賞（2008年）などの受賞歴がある。また、過去に文部科学省科学官を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	しばらく学術会議の活動から離れていましたが、大きな転換点を迎えている中で、20期から24期にわたる連携会員、また学会役員、大学支援フォーラムPEAKS構成員、大学学長などの経験が少しでもお役に立てればと思っています。	第三部
52	鈴木 朋子	株式会社日立製作所専門理事／研究開発グループ技師長	化学、情報学	・CO2回収型石炭ガス化複合発電の高効率化を実現する低温作動型サワーシフト触媒の開発 ・廃プラスチック油化発電システムの開発 ・凝集・磁気分離方式を適用したバラスト水浄化システムの開発 ・カーボンニュートラルに向けたトランジション・シナリオに関する研究および提言書作成	企業において、資源有効利用・環境保全を目的とした新規材料・プロセスの研究開発に従事し、多くの研究成果を挙げると共に、バラスト水浄化システムに関しては、日本初の国際海事機関の型式認証取得およびエコプロダクツ大賞「国土交通大臣賞」受賞(2010年)に貢献した。さらにサステナビリティに関するR&D戦略の策定、大学との産学協創事業など、幅広く活躍してきた。また、過去に内閣府民間資金等活用事業推進委員会専門委員を務めた経験がある。	材料・化学工学分野の専門知識や国内外の産官学ネットワークを活用し、気候変動や生物多様性などの環境に係るグローバルアジェンダを中心に、これらのテーマに関連する分野会や委員会への参画や社会的な発信に努めて参ります。	第三部
53	関谷 毅	大阪大学産業科学研究所教授	総合工学	・ナノ材料の界面制御技術の研究開発 ・フレキシブル・ストレッチャブルエレクトロニクスの研究開発と社会実装 ・シート型センサシステムの研究開発と社会実装	フレキシブル・ストレッチャブルエレクトロニクスを専門とし、大阪大学総長補佐、日本工学アカデミー理事、ベンチャー企業の創業者でもある。また、国際学術誌の編集や、超党派議員連盟の有識者会議への参加などの活動を行ってきた。文部科学大臣若手科学者賞（2015年）などの受賞歴がある。現在、内閣府マテリアル戦略担当構成員、文部科学省科学技術・学術審議会専門委員を務めている。	我が国が強みを有するマテリアルを基軸に、新しい潮流を創出し、世界を牽引する産業構造を実現するための政策提言、情報発信、人材育成を推進する。	第三部
54	田浦 健次朗	東京大学大学院情報理工学系研究科教授	情報学	・並列処理のための実行時システム ・大規模テキスト処理のための構文解析器生成系 ・プライバシー保護を保証する汎用データ基盤・プログラミング環境	高性能計算を専門とし、これまで我が国の主要大学に設置されたスーパーコンピュータセンター群を束ねる「学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点」を率いるなどの活動を行ってきた。情報処理学会論文賞（2006年）などの受賞歴がある。また、過去に文部科学省科学技術・学術審議会専門委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	情報科学、 情報技術の専門家として数多くの分野の方々と協調、特に情報基盤センター長として全国的に必要な情報基盤の方向付けと実現に貢献したい。また、 教育研究に携わる一大学人として、 大学教育・業務におけるICT活用推進、 人材育成、 DXに貢献したい。	第三部
55	高木 周	東京大学大学院工学系研究科教授	機械工学	・微量の表面活性剤が気泡流乱流の大規模渦構造に与える影響に関する研究 ・生体力学シミュレーションの医療応用に関する研究 ・エアリフトポンプによる深海底からの揚鉦技術に関する研究	流体工学を専門とし、これまで特に混相流れ、生体流れの分野で優れた業績を収め、国際学会誌のEditorを務めるなどの活動を行ってきた。現在、日本流体力学会会長を務め、国際理論応用力学連合（IUTAM）の国際組織の委員会メンバーに選ばれており、今後、国際学術団体との連携が期待される。日本機械学会論文賞（研究）（2007年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	力学分野における日本研究者の国際的Visibilityをあげることに對して強い思いを持っている。現在、日本学術会議の支援している国際理論応用力学連合（IUTAM）の国際組織の委員会メンバーにも選ばれており、日本と海外の研究者を結びつける活動を様々な観点から行っており、更なる発展に貢献したい。	第三部
56	高橋 尚人	東京大学医学部附属病院小児・新生児集中治療部教授	臨床医学	・新生児免疫寛容のメカニズムの研究および自己免疫疾患母体管理のガイドライン作成 ・新生児生命倫理研究会の発足と研究会の開催 ・スーパー抗原による新しい新生児感染症の発見とその検査方法や診断基準の作成 ・新生児のエピゲノムやマイクロバイオームに関する研究	新生児学を専門とし、これまで画期的な研究業績をあげるとともに、小児・新生児を診療する医療者として指導的な役割を果たし、学会においても小児科専門医、新生児専門医の人材育成や国際学術交流について中心的役割を果たしてきた。日本小児科学会学術研究賞（2011年）などの受賞歴がある。また、過去に厚生労働省医政局小児科における医師偏在指標作成検討委員会委員を務めた経験がある。	新生児医学研究は日本と世界の次世代のために重要な学問です。特に今後は医学研究と生命倫理などの社会学系を統合した学際的研究が必要です。今後の新生児に関する世界的研究の発展と社会基盤の構築に貢献したいと考えています。	第二部
57	高橋 良輔	京都大学大学院医学研究科臨床神経学教授	臨床医学	・パーキンソン病とその関連疾患の病態解明・治療法開発 ・神経変性疾患の分子メカニズムの解明	神経内科学を専門とし、これまでパーキンソン病とその関連疾患の病態解明・治療法などの研究を進め、一流学術誌への論文掲載が多い。また、日本脳科学関連学会連合(医学・生物学・心理学分野の基礎・臨床30学会加入、会員総数約11万人)の代表を務めるなどの活動を行ってきた。日本学術会議連携会員、「脳とこころ分科会委員長」としての活動実績もある。	我が国の今後の学術発展のために臨床神経科学分野を専門とする研究者として人文科学系、理工系を含めた異分野の研究者との議論に積極的に参加し、学術振興に貢献したい。	第二部
58	高柳 大	味の素株式会社理事／バイオ・ファイン研究マテリアル&テクノロジーソリューション研究所長	化学、薬学	・血栓症の原因となる酵素の選択的阻害剤の探索合成 ・バンコマイシンアグリコンの世界初となる全合成の達成	専門は有機合成化学だが、これまで長年企業において幅広い分野における研究活動に従事し、現在研究所長であり、研究及び経営マネジメントに精通している。この間、アフリカでの栄養改良プロジェクトに参画し、製品の開発、ローカルビジネスモデルの構築にも携わり、同時に、大学においても企業の立場から将来のイノベーション人財の育成に積極的に取り組むなどの活動を行ってきた。今後、学術と社会との対話、異なる専門間をつなぐうえで大きな貢献が期待される。	VUCAの時代と言われる今日において日本が国際社会での地位をより一層高めるために、高度な科学技術を維持発展させるのみならず、複数の専門分野を連携しイノベーション創出を促す施策等を提案し、SDGsの達成に貢献したいと存じます。	第三部
59	竹内 徹	東京工業大学環境・社会理工学院教授	土木工学・建築学	・耐震・免震・制振構造 ・鉄骨構造 ・シェル・空間構造	建築構造及び材料関係を専門とし、特に耐震・免震・制振構造に造詣が深い。これまで企業において海外プロジェクトを含め19年の実務経験があり、日本建築学会賞(論文)（2011年）、日本建築学会著作賞（2019年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	24期、25期と2期にわたり、連携会員として活動に参加して参りました。24期、25期を通じて土木工学・建築学委員会の幹事を務め、25期には自ら提案した分科会「感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市の再考分科会」を立ち上げ、21名の委員と共に活動し、公開シンポジウム等を通じ意見を発信してきました。次期においてもより広い視点より社会に貢献して参りたいと考えております。	第三部
60	竹沢 泰子	関西外語大学国際文化研究所教授	地域研究	・アメリカ合衆国の人種・エスニック関係 ・集団間の差異の表象をめぐる文理融合研究 ・日本の人種主義 多文化共生	文化人類学（エスニシティ研究、移民研究）、アメリカ研究を専門とし、これまで人種概念をめぐる言説について、長年、国際共同研究を推進し、あるいは多文化共生に関して高校生や当事者の参画を得ながら、社会的インパクトのあるシンポジウムを実施するなどの活動を行ってきた。日本民族学会（現 日本文化人類学会）澁澤賞（1995年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	これまで多文化共生分科会委員長としての提言の発出、文理融合を含む数多くのシンポジウムの企画・科研費を用いた共催など、日本学術会議の活動に連携会員として長きにわたり貢献してきました。今後も、文化人類学や関連領域に係る専門的知識や国内外のネットワークを活用し、多様性や人権に係る現代の社会課題を中心として、これらのテーマに関連する分科会や委員会での審議、シンポジウムの開催といった日本学術会議の活動に参画して参ります。	第一部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
61	竹中 麻子	明治大学農学部農芸化学科教授	食料科学	・タンパク質・アミノ酸栄養に関する分子栄養学研究 ・抗酸化ビタミン（ビタミンE、C）の欠乏と代謝に関する研究	栄養学・食品科学を専門とし、これまでタンパク質栄養に関する分子栄養学分野での優れた研究業績に加えて、国際活動や他分野の研究者との交流も積極的に行っている。若手研究者の時から高い評価を得て、日本栄養・食糧学会奨励賞（1998年）、日本農学進歩賞（2003年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	食品学、栄養学に係る専門的知識や国内外のネットワークを活用し、「心身の健康維持と食の関わり」という課題を中心に、これらのテーマに関連する分科会や委員会での活動に参画してまいります。	第二部
62	竹山 春子	早稲田大学理工学術院教授	統合生物学、基礎生物学	・微生物シングルセルゲノム・メタボロミックス解析の技術開発と応用 ・ゲノム情報を基にした環境未知微生物の資源化と有効活用研究 ・生命分子の計測システム開発と実装化	微生物工学をキーワードに、珊瑚礁保護などの環境問題に取り組んでいる。先端の遺伝子工学とラマン分光分析技術やマイクロ流体デバイスなどの最先端技術を駆使してマリンバイオテクノロジーの研究開発、さらにメーカーと協働して、新たな分析機器及びソフトウェアの実装化を進めている。文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）（2023年）、マリンバイオテクノロジー学会賞（2021年）などの受賞歴がある。また、現在文部科学省国立大学法人評価委員会専門委員、経済産業省産業構造審議会臨時委員を務めている。	今までに培った研究経験や社会貢献活動、人材育成経験の面からも今後の日本の学術の発展に資するために日本学術会議の活動に参加し貢献したいと思います。特に、ダイバーシティとインクルージョンの活動に積極的に参画したいと考えております。	第二部
63	多々納 裕一	京都大学防災研究所社会防災研究部門教授	土木工学・建築学、経済学	・災害リスクの制御・ファイナンスを含む総合的な災害リスク管理施策の計画・管理プロセスおよびそのガバナンスに関する研究 ・災害レジリエンスの計量化と要因分析に関する研究 ・社会経済の変化を考慮した気候変動に伴う洪水・高潮リスク変化の予測、インフラ整備を含む適応戦略に関する研究	防災経済工学を標榜し、総合的災害リスク管理及びそのガバナンス、災害に対するレジリエンス、災害による経済影響の分析に関して研究を推進してきた。国際総合防災学会（IDRim Society）では2010年の創設以来副会長を継続して努め、世界防災研究所連合（GADRI）の設立に貢献し事務総長を務めている。国際総合防災学会Distinguished Research賞（2020年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	土木計画学や災害経済学に関わる専門知識や国内外のネットワークを活用し、少子高齢化や科学技術の進歩、気候変動等の長期的な社会変化の下でのインフラのレジリエンスの問題を中心に、分科会や委員会での審議や日本学術会議の活動に参画してまいります。	第三部
64	只野 雅人	一橋大学大学院法学研究科教授	法学	・代表民主政・代表概念に関する歴史研究、基礎理論の研究 ・フランスと日本との比較を中心とした議会政・政治機構の制度・機能に関する研究、議会法に関する研究 ・フランスと日本との比較を中心とした選挙・選挙制度・政党に関する研究	憲法を中心に公法、基礎法、フランス法を専門とし、とりわけ憲法学分野での多くの優れた研究業績があり、日本公法学会、全国憲法研究会、憲法理論研究会に所属し、大学内では学部長を経験してきた。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	法学委員会「セーフティ・ネットのあり方を考える」分科会で他分野の研究者のみなさんと活動をしてきました。今後も分野横断的に社会課題に取り組む活動に従事し、学術会議の活動に参画してゆきたいと考えています。	第一部
65	田中 雅明	東京大学大学院工学系研究科スピントロニクス学術連携研究教育センターセンター長	電気電子工学、総合工学	・半導体スピントロニクス材料、強磁性半導体の創製、物性探索、機能開発 ・量子科学技術を用いた低消費電力、新機能デバイスの研究 ・新しい電子材料とナノ構造の結晶成長、作製技術の研究	電気電子材料工学を専門とし、これまで半導体スピントロニクス材料、強磁性半導体の創製と機能開発、量子科学技術を用いた低消費電力・新機能デバイスの研究において際立って大きな業績を挙げ、世界的に認知されてきた。またセンター長として、全国の連携ネットワーク作りと若手人材育成に尽力している。文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）（2012年）、Quantum Devices 賞（2022年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	日本および世界における学術・学問の発展とより健全な社会を構築し維持するために、中長期的視野に立ち、現実的観点も考慮しながら、微力ながら努めたいと思います。	第三部
66	田中 真美	東北大学大学院医工学研究科教授	機械工学	・触覚・触感のメカニズムの解明に関する研究 ・触覚・触診センサシステムの開発とその応用 ・バイオメカトロニクスを用いた医療福祉機器の開発に関する研究	ロボティクス（ロボット工学）およびバイオメカトロニクス（生体電子工学）の研究を中心に、これまで触覚・触感のメカニズムの解明から医療福祉機器への応用へと幅広い研究分野で活躍してきた。女性研究者・技術者の育成に力を入れており、文部科学大臣表彰「科学技術賞」（理解増進部門）（2022年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	専門分野である医工学、機械工学、メカトロニクス、ロボティクス等に関連する委員会活動やシンポジウムの開催などに携わり日本の科学の発展に貢献したいと考えております。また、若手研究者や女性研究者などが抱える問題解決にも貢献していきたいと考えております。	第三部
67	玉腰 暁子	北海道大学大学院医学研究院教授	健康・生活科学	・北海道大学C01-NEXT（文部科学省とJSTによる「共創の場形成支援プログラム」）の副プロジェクトリーダーを務め、産官学連携による疫学研究を進めている。 ・地域在住者を対象に生活習慣、環境要因や血清マーカーとがん、循環器疾患、高齢者の自立等の関連を検討している。 ・アクションリサーチ等の手法を用いて研究結果の地域還元を試みている。	衛生学および公衆衛生学を専門とし、これまで大型コホート研究で10年以上にわたり研究主宰者として活動し、最近では、産官学の共同研究を実施して、傑出した研究業績を上げてきた。日本疫学会奨励賞（2003年）、北海道知事賞（2021年）などの受賞歴がある。また、過去に環境省健康と環境に関する疫学調査検討会委員長を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	パブリックヘルス科学分科会と高齢者の健康分科会に所属しています。日本そして世界の人々が安心して健康に暮らせるよう、健康に関わる生活習慣、環境要因等を明らかにするとともに、その情報を活かしたまちづくりに関わっていききたいと考えております。	第二部
68	田村 圭子	新潟大学危機管理本部危機管理センター教授	土木工学・建築学、社会学	・発展途上の地域を事例として、インフラ整備・防災対策に係る地球規模課題に対し、参画型防災戦略計画策定手法に基づく解決策の提案 ・アクションリサーチによる災害・防災対策の現場における課題同定と計画・マニュアルに基づく解決策の社会定着 ・災害時における生活再建支援業務を事例として分野横断の知見を活用した研修・訓練システムの開発	危機管理・災害福祉を専門とし、ワークショップ等のファシリテーションを通じて実証的に社会調査する科学的手法を確立した。また、プロジェクトマネジメント手法を活用し、参画型合意形成の場において防災戦略を構築する手法を開発し、国内外で採用されている。防災功労者防災担当大臣賞（2018年）などの受賞歴がある。また、過去に内閣府中央防災会議専門委員、文部科学省科学技術・学術審議会専門委員、国土交通省国土審議会委員を務めた。日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	社会科学における危機管理・防災の知見を持って、安全安心な社会の実現に向けて、学術会議での分野横断の議論を活発化させます。また、日本及び地球規模の社会課題を解決するために、人間科学の視点から土木計画学の発展に寄与します。	第三部
69	常行 真司	東京大学大学院理学系研究科教授	物理学	・固体表面、超高圧下、実験的観測の困難な不純物水素を含む系など、極限条件下における物質構造と物性に関する、第一原理に基づく理論研究 ・非調和フォノン物性、超伝導、強相関物質の電子状態、未知の結晶構造などを予測するための、新しい第一原理計算手法の開発	計算物理学を専門とし、これまでスーパーコンピュータのアプリ開発・利用と計算科学分野振興に関する文科省プロジェクトで、分野間連携、分野振興の中心的役割を果たし、国際純粋応用物理学連合（IUPAP）C20 委員会（計算物理学）委員として、国際活動にも貢献するなどの活動を行ってきた。日本IBM 科学賞（物理分野）（2001年）などの受賞歴がある。また、過去に文部科学省科学技術・学術審議会専門委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	学術会議は科学研究のより良い将来を模索し、科学者の意見をまとめ、政府や社会に対する提言・発信を通して日本の科学振興を図る重要な組織だと認識しています。独立性を保ちながらも政府との対話を図り、その役割を全うできるように努力したいと思います。	第三部
70	戸谷 圭子	明治大学専門職大学院グローバル・ビジネス研究科教授	経営学	・サービス共創価値測定尺度の開発 ・持続可能性を考慮したサービス・エコシステム ・製造業のサービス化（サービタイゼーション）の促進・阻害要因の国際比較	商学を専門とし、特にサービスマーケティング研究の第一人者であり、数多くの国際的共同研究や業績をあげている。他方、上場企業の社外取締役を複数務めるなど、今後、学術と産業界の連携役としての貢献が期待される。サービス学会Best Paper Award（2018年）などの受賞歴がある。また、現在経済産業省日本産業標準調査会臨時委員を務めており、過去に文部科学省中央教育審議会専門委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	連携会員として、23期より活動しております。経営学委員会、総合工学・経営学の合同委員会において、委員、幹事、副委員長として、参照基準や複数の提言の作成に携わってきました。複数上場企業の社外取締役を務めていることから実業界との関わりが強く、学術と実務の連携に役立ちたいと考えております。また北欧、特にスウェーデン商科大学（2023年9月まで在籍予定）とは共同研究、国際会議開催などで既に協力関係が構築されており、今後より発展させたいと考えております。	第一部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
71	永井 由佳里	北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）理事／副学長	情報学、哲学	・デザイン学（理論と実践、メディアアート） ・創造性研究（創造的思考、イノベーション論、STEAM） ・知識科学の研究（デザイン思考、知識共創システム） ・新興情報技術の社会実装・活用・高度化と人材育成	デザイン学を専門とし、ヒューマンインターフェース関連など広い分野で活躍されている。これまでイノベーションの社会的受容プロセスの解明など分野横断的・学際的な研究活動を行うほか、海外大学との連携、国際学術団体の運営など国際活動も豊富である。Excellent Contribution Award（The Design Society, 2002年）などの受賞歴がある。人文・社会科学との接点もあり、今後、広い視野での活動が期待できる。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	個の創造性と社会イノベーションを高次に繋ぐ新たな知識科学が求められています。その実現には多様な方々との対話が欠かせません。人間らしい感性と先端科学技術・産業の知を重ね、未来社会のデザインに動しむ所存です。	第三部
72	中澤 高志	明治大学経営学部教授	地域研究	・日本の経済地理学の学史との関連で、経済地理学の学問としての本質および任務について検討すること。 ・経済・社会の発展に伴って、地域構造及び都市構造がいかに変化し、そこにおける人々の住まいと仕事のあり方がどのように変化するかを明らかにすること。	経済地理学、都市社会学を専門とし、これまで若手アカデミーの会員として多様な分野の若手研究者と協力して大学の国際化に向けて取り組んできた。労働を地理学から論じた業績は高く評価されており、日本地理学会賞（2015年）、経済地理学会賞（2015年）、人文地理学会賞（2022年）などの受賞歴がある。今後、人文・経済地理学分野の活動の中心となることが期待される。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	専門である経済地理学の研究を推進し、その成果を積極的に政府や社会に発信することを目指します。2022年度から高等学校で必修化された地理総合について、教育現場との対話を積極的に行いながら、他の会員と共に、より良いカリキュラムや大学入試の実現にむけて努力します。	第一部
73	中野 貴由	大阪大学大学院工学研究科マテリアル生産科学専攻教授	材料工学	・異方性材料科学の構築（特定の方向に高機能性を発揮するための材料科学） ・生体材料学・骨評価学（骨組織を中心とした材料学的観点からの微細構造の骨質評価法の提案とそれに基づく医療用デバイスの研究開発） ・結晶塑性学・AM材料学（構造・機能材料における転位論を基軸としたミクロ・マクロ力学解明と金属AM（Additive Manufacturing）を用いた結晶配向化制御に基づく機能制御）	バイオマテリアル（医用材料科学）を専門とし、これまで府省横断型の国家プロジェクトの研究代表者を務める一方、日本金属学会会長、日本骨形態計測学会会長を務めるなど、医歯薬工連携の学際的領域の融合のキーパーソンとして幅広く活躍してきた。文部科学大臣表彰・科学技術賞（研究部門）（2020年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	国際社会における急速な科学技術の進歩・発展の中で、教育・学術の推進が我が国の将来を持続的に支える唯一の原動力であるものと確信しています。これまでの医歯薬工連携融合に関する教育・研究活動経験を活かして、日本学術会議のさらなる発展に尽力する所存です。	第三部
74	中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構教授	哲学、史学	・研究公正の現状および課題に関する研究と公正研究の推進に向けた活動 ・科学コミュニケーションに関する研究とサイエンスカフェやシチズンサイエンスの普及 ・フランスおよび日本の産業化・工業化に関する歴史研究	科学技術史についての専門的知見を基礎として、研究倫理、科学と市民との関係について広く考察し、サイエンスカフェなどの対話的実践をも積極的に行ってきた。大阪大学賞（大学運営部門）（2021年）などの受賞歴がある。また、現在文部科学省公正な研究活動の推進に関する有識者会議委員を務めるほか、日本学術会議連携会員、若手アカデミー会員としての活動実績もある。	これまで日本におけるサイエンスカフェやシチズンサイエンスの普及、研究公正を推進する体制の確立や、日本学術会議若手アカデミーの設置などに取り組んできました。学術コミュニティが社会と対話し、ともに協働した取り組みを進めていくことの重要性は、従来になく高まっています。そのような学術コミュニティと社会との連携強化に貢献できればと考えています。	第一部
75	中村 雅也	慶應義塾大学医学部整形外科教室教授	臨床医学、基礎医学	・iPS細胞を用いた脊髄再生医療の基礎・臨床研究を行っており、2021年に世界初となる細胞移植を実施した。 ・運動器慢性疼痛の臨床（疫学調査）及び基礎研究 ・脊髄腫瘍に関する臨床的研究	脊椎外科を専門とし、基礎医学・臨床医学の多くの異なる分野を繋げる能力を有しており、これまでiPS細胞を用いた脊髄再生医療の基礎・臨床研究のほか、慢性疼痛の臨床（疫学調査）及び基礎研究、産官学民の連携共創の場形成支援プロジェクトなどの活動を行ってきた。日本整形外科学会奨励賞（2006年）、日本再生医療学会賞（2014年）などの受賞歴がある。現在、第25期補欠会員であり、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	これまでの大型プロジェクトでの経験を活かして、①健康寿命の延伸に向けた運動器の慢性疼痛に対する取り組み、②医療・介護・ヘルスケアにおけるDx、③異分野融合研究によるイノベーションの加速、④再生医療のさらなる発展に積極的に活動して参りたいと思います。	第二部
76	中室 牧子	慶應義塾大学総合政策学部教授／公益財団法人東京財団政策研究所研究主幹	経済学	・教育政策の効果検証 ・学力や非認知能力を高める教育手法の開発とその評価 ・幼少期の子どもの発達と保育の質	教育経済学を専門とし、これまで教育政策の効果検証、学力や非認知能力を高める教育手法の開発とその評価などで成果を上げてきた。また、デジタル庁のシニアエキスパート（デジタルエデュケーション）として教育分野のデータ利活用の促進や地方自治体における子供に関するデータ連携の実証事業の責任者を務めている。日本教育社会学会国際奨励賞（2012年）などの受賞歴がある。今後、政府と社会の対話による課題解決などの活動が期待される。また、現在、内閣府規制改革推進会議委員、経済産業省産業構造審議会委員を務めている。	これまで政府や自治体と協力して、就学期の子どもの大規模な縦断データの収集や行政記録情報の研究利用を進めてきており、こうした経験を活かして、日本の行政が保有するデータの研究利用を一層進め、エビデンスに基づく政策形成（EBPM）を推進するために貢献したいと考えております。	第一部
77	西岡 加名恵	京都大学大学院教育学研究科教授	心理学・教育学	・教育方法学 ・学校のカリキュラム改善に関する研究 ・パフォーマンス評価の開発と活用に関する研究	カリキュラム論・評価論を専門とし、その研究成果は文科省・地方教育委員会、学校現場に大きな影響を及ぼしている。また、英語による著書もあり、国際的な発信力を有している。これまで産学連携によるデジタル・コンテンツ開発、厚生労働省からの依頼による看護教員養成のeラーニングコンテンツの作成などの活動を行ってきた。また、過去に文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（SSH）支援事業の今後の方向性等に関する有識者会議委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	私は教育方法学研究者として、様々な学校との共同研究に取り組んでいます。また分科会幹事として、参照基準や報告の作成に参画してきました。それらの経験を活かし、より良い教育の在り方を提案する活動に携わりたいと考えています。	第一部
78	西川 正純	宮城大学理事／副学長／食産業学群教授	食料科学	水産物に多く含まれるDHAやEPAの栄養機能について長年研究しておりまして、魚食（和食）の重要性についても啓蒙活動を行っております。また、東日本大震災以降の東北沿岸部の水産業・水産加工業への技術支援、並びに地域食材のブランド化を科学的側面から支援し、地域経済の活性化を目指しております。	専門は食品科学であり、水産物関連の食品企業での勤務経験がある。これまで魚介類などの海洋資源から機能性食品素材の抽出・精製と効果の評価に関して優れた研究業績を有し、医学と薬学の分野で学位を取得している。宮城県を中心とする東北地方の産業振興・地域振興にも取り組んできた。日本脂質栄養学会ランズ賞栄養功労賞（2018年）などの受賞歴がある。今後、食品科学と医学の連携や産学連携などでの活躍、東北地区学術会議の活動への貢献などが期待される。	日本古来の魚を中心とする和食は健康食として世界で認められております。昨今、食の欧米化の影響からか魚食離れが進行しており、日本の食文化が変わりつつあります。小職は、日本の食文化を守りつつ、昨今の国際情勢を鑑み、我が国の食料安全保障の強化にも目を向け取り組んでいきたいと考えております。	第二部
79	野田 岳志	京都大学医生物学研究所教授	基礎医学	・インフルエンザウイルスや新型コロナウイルスなど呼吸器疾患を引き起こすウイルスの分子構造、細胞内増殖機構とその制御法に関する研究 ・エボラウイルスやラッサウイルスなど重篤な出血熱を引き起こすウイルスの分子構造、細胞内増殖機構とその制御法に関する研究	ウイルス学を専門とし、一貫してウイルスタンパク質の構造解析を進めてきた。発展著しいクライオ電子顕微鏡を使った解析においては本邦の第一人者である。これまで新型インフルエンザの研究、新型コロナウイルスの構造解析も行うなど、今後、パンデミック問題への対応などでも活躍が期待できる。文部科学大臣表彰若手科学者賞（2012年）、日本微生物学連盟野本賞（2021年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	基礎ウイルス学に係る専門的知識を活用し、ウイルス感染症に係る社会課題を中心に、これらのテーマに関連する分科会や委員会での審議やパンデミック対策といった日本学術会議の活動に参画してまいります。	第二部
80	野出 孝一	佐賀大学医学部長・内科主任教授	臨床医学、健康・生活科学	・循環器病と高血圧・脂質異常症・動脈硬化の診断・治療に関する研究 ・心血管不全の臨床生理学と生物医学研究 ・産官学連携による循環器病予防に関する研究 ・心血管代謝・糖尿病領域の臨床薬理学研究とエビデンス創出 ・心血管代謝領域の分野融合研究とガイドライン・ステートメント作成	循環器内科学を専門とし、これまで他分野との共同研究、省庁研究事業への参画などの活動を行い、基礎から臨床にかけて幅広い研究業績がある。日本循環器学会、日本高血圧学会をはじめ、多数の学会で理事を務めるなど、学会活動に真摯に取り組んでおり、米国心臓協会など国際活動も活発である。日本循環器学会CIPS（国際心血管薬物療法会議）賞（1999年）などの受賞歴がある。過去に厚生労働省脳・心臓疾患の労災認定の基準に関する専門検討会委員を務めた経験がある。	「知の統合」に向けた革新的医文理融合研究を推進し、政府への積極的政策提言と国際社会への情報発信に努めてまいります。国民との対話を進め、世界のナショナルアカデミーと協調しながら健やかな未来社会実現に向けて微力ですが尽力致します。	第二部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
81	早川 誠	立正大学法学部法学科教授	政治学	・歴史的アプローチを用いた、現代政治理論における代表制・代議制の研究 ・政治参加における市民熟議の意義および熟議と政治制度の連携に関する研究 ・社会内の集団の役割を中心とした、20世紀以降の英米政治理論の比較研究	政治学を専門とし、これまで熟議民主主義や代表制の理論など、現代政治の諸問題に直結する研究や、地方自治体の実務との連携、NIRA総合研究開発機構研究プロジェクトへの参加などの活動を行ってきた。立正大学蘊奥褒賞（2013年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	政治学・政治思想の専門知識と、自治体連携や社会連携のネットワークを活用して、政治・政治学の活性化に尽力したいと考えています。若年層の政治参加やジェンダー格差などの課題にも、他分野と連携して活動に取り組んでまいります。	第一部
82	樋田 京子	北海道大学大学院歯学研究院血管生物分子病理学教室教授	歯学、基礎医学	・腫瘍血管内皮細胞の異常性の解明と標的化に関する研究 ・新型コロナウイルスにおける血管病態に関する研究 ・腫瘍循環器学における腫瘍血管の病態に関する研究 ・ジェンダーダイバーシティ推進に関する活動	口腔病理学を専門とし、これまでがんや血管新生の研究に関して、多くの学術的成果を挙げており、専門領域にとどまらず、第一線で活躍するとともに、ダイバーシティ・インクルージョンの推進にも尽力してきた。日本病理学会学術研究賞（2010年）、日本女性科学者の会奨励賞（2017年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	腫瘍学、血管生物学に関わる専門的知識や国内外のネットワークを活用し、歯学、口腔医学に係る社会課題を中心にこれらのテーマに関連する分科会や委員会での審議、さらに学術分野のダイバーシティ推進といった日本学術会議の活動にも参画してまいります。	第二部
83	広井 良典	京都大学人と社会の未来研究院教授	社会学、環境学	・「持続可能な福祉社会」と呼ぶうる、環境・福祉・経済が調和した社会像の構想 ・医療・福祉や社会保障、環境、都市・地域等に関する政策研究 ・死生観やケア、コミュニティ等に関する哲学的探究	専門分野は公共政策、科学哲学、社会福祉学など広範にわたり、その研究活動は超学際的である。厚生労働省での実務経験を有し、国土計画や環境基本計画等の策定作業にも貢献してきた。「鎮守の森コミュニティ研究所」を立ち上げ、地域コミュニティのひびとともに研究と実践を進めている。エコノミスト賞（2000年）などの受賞歴がある。また、現在国土交通省国土審議会特別委員、環境省中央環境審議会専門委員を務めているほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	専攻領域である公共政策と科学史・科学哲学の知見を踏まえつつ、理念・哲学と社会システム・政策をつなぐような、分野横断的な研究を進めていきたい。	第一部
84	福島 孝典	東京工業大学科学技術創成研究院化学生命科学研究所教授	化学	・有機分子や高分子をスケール横断的に精密集積化するための革新的手法の創出を通じ、新機能や新現象を発現するソフトマテリアルの創製、表面／界面の物理的・化学的性質の制御、および有機・高分子系物質を用いたナノスケールの熱制御技術の開拓など、ナノとマクロを繋ぐトランススケール分子技術に関する先導的研究	精密分子集積化学を専門とし、独自かつ高度な分子設計に基づき卓越した業績を挙げている。新学術領域の領域代表者、若手研究者研究支援事業のパネルオフィサー、アドバイザーなども務めている。文部科学大臣表彰「科学技術賞」（研究部門）（2020年）、高分子学会賞（2020年）などの受賞歴がある。	有機・高分子・超分子化学や有機材料科学に関する専門知識や国内外ネットワークを活用し、化学・材料科学に関連する委員会および分科会での審議や国際活動といった日本学術会議の取り組みに参画してまいります。	第三部
85	古屋敷 智之	神戸大学大学院医学研究科教授	基礎医学	・ストレス・うつ病の生物学的基盤に関する研究 ・脳機能の老化の生物学的基盤に関する研究 ・レジリエンスの生物学的基盤に関する研究	薬理学、神経科学を専門とし、ストレスによる脳内の細胞生物学的変化およびそれに随伴する行動の変容について優れた研究業績を有している。これまで医学教育のほか、製薬企業との共同研究などの活動を行ってきた。日本薬理学会学術奨励賞（2012年）などの受賞歴がある。現在、第25期補欠会員であり、また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	薬理学・神経科学に係る専門的知識や国内外のネットワークを活用し、社会や環境によるストレスや老化による心の病に係る社会課題を中心に、これらのテーマに関する分科会や委員会での審議や学術フォーラム・シンポジウムの企画、第一部等との連携による文理融合研究推進など、日本学術会議の活動に参画してまいります。	第二部
86	堀 正敏	東京大学大学院農学生命科学研究科獣医薬理学研究室教授	食料科学、基礎医学	・間葉系幹細胞による臓器線維症の分子メカニズムの解明 ・消化管における免疫－運動連関の解明 消化管常在型マクロファージによる炎症/抗炎症シグナルの解析 ・天然有機化合物の生理活性作用の解明 海産毒、食品成分、漢方成分の機能解析 ホスファターゼ阻害剤であるOkadaic acid やCalyculin Aの発見に貢献した。	獣医薬理学・家畜生理学を専門とし、これまで全国大学獣医学関係代表者協議会会長、獣医学共用試験CBT委員会副会長などとして、獣医学教育の改善に尽力するとともに、アカデミア創業の発展に向けた支援事業の学術広報活動を担うなどの活動を行ってきた。日本獣医学賞（2011年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	獣医学は比較動物医科学研究を特色とする裾野の広い研究分野を有している。感染症研究、食の安全と確保、環境保全、さらには人医療分野への貢献に至るまで『One Health』の精神をモットーに様々な分野との連携を深めていきたい。	第二部
87	松本 健郎	名古屋大学未来社会創造機構予防早期医療創成センター教授	機械工学	・生体組織・細胞のバイオメカニクス（生体組織・細胞の力学特性計測と力学的刺激に対する応答の解明） ・生物の形作りのバイオメカニクスとその工学応用（生物の形態形成に対する力の影響の解明とものづくりへの応用） ・力学的刺激に対する応答を用いたヒト動脈の健康度評価装置の開発	バイオメカニクス（生体工学）を専門とし、これまで特に血管力学の分野で優れた業績を収めてきた。日本機械学会バイオエンジニアリング部門長、Asian-Pacific Association for Biomechanics のPresident、バイオメカニクスの重要な世界組織World Council of Biomechanicsの理事を務め、今後、国際交流への貢献が期待される。日本機械学会バイオエンジニアリング部門業績賞（2013年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	日本学術会議の必要性を国民に理解して頂くには我が国の抱える諸問題（少子高齢化、低食糧自給率など）について提言するだけでなく具体的な解決策を検討し、示していく必要があると考える。このような面に微力ながら協力していきたい。	第三部
88	松本 直子	岡山大学文明動態学研究所教授	史学	・文明形成メカニズムに関する分野横断的・比較考古学的研究 ・ジェンダー視点からの考古学研究と現代社会との関わりに関する研究 ・認知考古学の理論的・実践的研究 ・考古資料の理化学的分析に関する国際的・学際的共同研究	考古学（認知考古学、ジェンダー考古学、比較考古学）を専門とし、これまでヨーロッパの考古学者らとともに最先端の科学的調査を行うなどの活動を行ってきた。現在、文科省の新学術領域研究の領域代表として、考古学、文化人類学、自然人類学、認知科学、神経科学、遺伝学等、多くの分野を統合することによって人類史の新たな理解を推進する研究を行っている。雄山閣考古学特別賞（2002年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	現代社会が抱える多くの課題に対する解決方法を模索し、よりよい社会を築いていくためには、学術の健全かつ活発な営みが不可欠である。とくに分野を超えた連携、国際的な連携を積極的に推進したい。	第一部
89	眞鍋 史乃	星薬科大学薬学部教授／東北大学大学院薬学研究科教授	薬学、化学	・反応開発、生物活性糖鎖合成を中心とした糖質有機合成化学 ・抗体糖鎖改変を主とした複合糖質化学 ・抗体化学修飾による抗体薬物複合体を主としたドラッグ・デリバリー・システムの開発	薬系化学および創薬科学を専門とし、生物有機科学分野の優れた女性研究者である。これまで化学と生物の学際領域である糖質研究などの活動を行ってきた。有機合成化学協会カネカ・生命科学賞（2020年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	有機化学を基盤にした複合糖質科学やドラッグデリバリーに係る専門的知識に関する国内外のネットワークを活用し、国内の創業力の強化に関連する分科会や委員会での審議などの日本学術会議の活動に参画してまいります。	第二部
90	丸谷 浩介	九州大学大学院法学研究院教授	法学、社会学	・社会保障法 ・社会福祉学 ・労働法	労働法と社会保障法の両分野に通暁し、優れた研究業績を有し、イギリス法についても深い学識を有している。コロナ禍での雇用、労働法、社会保障法関係でも多くの論考を発表しており、社会保障法分野では、現在、政府でも検討事項となっている全世代型社会保障についての論考を公表している。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	科学技術及び学術の政治的独立と学術的見地のみに従った意見発信の確保は、我が国の健全な民主社会樹立のために必要不可欠である。昨今の日本学術会議を取り巻く状況は、日本の立憲主義そのものを脅かす事態であるといえ、会員任命問題や組織の在り方に矮小化される問題ではない。社会科学を研究する者として、微力ながら持続可能で健全な民主主義社会の構築に貢献する所存である。	第一部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
91	三浦 佳子	九州大学大学院工学研究院化学工学部門教授	化学	・糖鎖高分子による生体機能性高分子の開発 ・糖鎖高分子による高分子医薬の開発 ・多孔性高分子を用いた固体触媒およびフロープロセスの開発	高分子化学を専門とし、これまで糖鎖高分子の複合化、機能化の分野で世界を先導し、男女共同参画事業、海外学術誌の編集などの活動にも携わってきた。日本化学会学術賞（2022年）などの受賞歴がある。また、現在内閣府食品安全委員会専門委員であり、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	学術の個々の分野では取り扱うことのできない、社会問題への取り組み、国際的な課題を扱うことができ、学術会議の重要性は高い。サイエンスの全般的な方向性、社会とのかかわりについては重要性が高い。日本の学術の向上に貢献したい。	第三部
92	美馬 のゆり	公立はこだて未来大学システム情報科学部教授	心理学・教育学、情報学	・教育工学、学習科学、情報工学、認知心理学 ・人がいかに学ぶかについての理解に基づいた学習環境（空間、活動、共同体、ツール、デザイナー）のデザイン ・学習環境としての学校、ミュージアム、市民活動のデザイン	研究分野は学習支援システムやヒューマンインタフェースで、心理学・教育学と情報学にまたがっている。日本放送協会経営委員会委員、日本科学未来館（副館長）、地域密着のイニシアティブなど、社会的にも広く活躍しており、科学技術分野の文部科学大臣表彰（理解増進部門）（2014年）などの受賞歴がある。また、過去に文部科学省中央教育審議会委員、同省科学技術・学術審議会委員を務め、現在経済産業省産業構造審議会委員を務めており、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	学術的背景および社会的経験を活かし、政府・社会に対して科学者の意見の直接提言や、市民社会との対話を通じた科学技術への理解増進、次世代の育成、地域社会の学術振興や学協会の機能強化、国際学術交流の推進に貢献していきたい。	第一部
93	明和 政子	京都大学大学院教育学研究科教授	心理学・教育学、情報学	・ヒトとヒト以外の霊長類を胎児期から比較し、ヒト特有の脳・精神機能の創発・発達とその生物学的基盤を明らかにする「比較認知発達科学」を開拓した。 ・ヒトの社会性およびその多様性が創発する機序と生物学的基盤を、「腸内細菌叢～内分泌系～自律神経系～中枢神経系～心理・行動」の多層データから解明してきた。	発達科学を専門とし、幅広い分野の研究者や企業と共同に研究を進めている。これまで一般書やテレビを通じて子育てに関する情報発信を行ってきた。日本心理学会国際賞奨励賞（2012年）などの受賞歴がある。また、過去に文部科学省科学技術・学術審議会委員、こども家庭庁「就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針」に関する有識者懇談会委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	ヒトの脳と心は、環境の影響を強く受けながら育まれていきます。人間科学のアプローチを軸に、次世代人類が多様な幸福を追求できる社会の実現に貢献しうる学術の発展、研究力強化に尽力してまいります。	第一部
94	望月 拓郎	京都大学数理解析研究所教授	数理科学	・代数多様体上の調和束の無限遠における漸近挙動について調べ、その知見をもとにして、半単純ホロノミックD加群と純ツイスターD加群の間の同値性を確立した。その応用として、ホロノミックD加群の半単純性が積分によって保たれることを示した。	代数・幾何・解析の広い分野で数理科学の新しい分野を開拓し、世界的な卓越した業績を有する。日本学士院賞（2011年）、朝日賞（2021年）のほか、日本人初の数学ブレイクスルー賞（2022年）などの受賞歴がある。	これまで個人レベルでの数理科学の研究に励んできましたので、日本の学術活動全体についての見識があるわけでもなく、職務を果たせるか不安もありますが、バトンを次の世代につないでいくために少しでもお役に立てれば、と考えています。	第三部
95	森 和俊	京都大学国際高等教育院（大学院理学研究科併任）教授	基礎生物学	・小胞体ストレス応答・小胞体関連分解の解析 小胞体は、細胞間コミュニケーションに重要な役割を果たす分泌タンパク質や膜タンパク質が高次構造を形成する細胞小器官であり、構造異常タンパク質が小胞体に蓄積すると様々な障害が生じる。このような異常事態に対応するのが小胞体ストレス応答と小胞体関連分解であり、私はこれらの仕組みと生物学的意義を解析してきた。	専門は分子生物学であり、これまで小胞体ストレス応答の分子機構の解明などの業績がある。生物学、化学を含む幅広い分野において、当該分野のトップ科学者として国内外から高く評価されており、アルバート・ラスカー基礎医学研究賞（2014年）、恩賜賞・日本学士院賞（2016年）などの受賞歴がある。	分子細胞生物学に係る専門的知識や国内外のネットワークを活用し、健康寿命の延伸に係る社会課題を中心に、これらのテーマに関連する分科会や委員会での審議や我が国の学術の発展・研究力強化に関する検討といった日本学術会議の活動に参画してまいります。	第二部
96	森口 祐一	国立研究開発法人国立環境研究所理事（研究担当）	環境学、土木工学・建築学	・循環型社会・循環経済に関する評価手法、特に物質フロー・ストック分析とこれに基づく指標。 ・ライフサイクルアセスメント手法、特にプラスチックリサイクルや温暖化対策技術への適用。 ・大規模災害による環境影響の解明と環境回復対策、特に放射性物質汚染問題および災害廃棄物問題。	環境学（循環型社会システム、環境システム）を専門とし、これまで放射性物質汚染問題および災害廃棄物問題、循環型社会に関する評価手法などに関して学際研究、各府省への協力、国際協力、地域への実践活動などを積極的に実施してきた。ISIE Society Prize（2013年）、環境科学会学術賞（2014年）などの受賞歴がある。また、過去に環境省中央環境審議会臨時委員、グリーンイノベーション戦略推進会議委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	国立研究機関、大学、官庁、国際機関での従事経験から得た「社会の中の学術・科学」観をもとに、環境学、土木工学・建築学、防災減災、総合工学、材料工学などの分野で連携会員として携わってきた学際的な活動を継承・発展させる。	第三部
97	森田 一樹	東京大学大学院工学系研究科マテリアル工学専攻教授	材料工学	・金属精錬反応に関わる熱力学研究 ・新規太陽電池用シリコン精製プロセスの開発とその物理化学 ・溶融酸化物の熱物性と構造評価およびモデル構築	金属素材製造を専門とし、特に鉄鋼製錬の専門家として国際的に著名な研究者であり、素材プロセス技術を利用した太陽電池級多結晶シリコンの精製プロセス開発や金属系素材の循環利用に関する研究など、高温反応の熱力学の多様な応用展開に成功しており、国際共同研究など、国際連携に関する実績も多い。日本鉄鋼協会学術功績賞（2017年）、日本金属学会谷川・ハリス賞（2020年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	自身のベースである材料工学分野のみならず、自然科学全般の研究・教育の発展に尽力するとともに、我が国における教育課題、特に受験を経た中等・高等教育の橋渡しや男女格差問題を解決すべく、持続可能社会の確立を念頭に広く国民に貢献したい。	第三部
98	森山 啓司	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学分野教授	歯学	・頭蓋顎顔面領域の先天異常ならびに成長発育疾患の発症機構の解明ならびに診断・治療法開発に関する研究 ・新規歯科矯正用装置の開発に向けた生体材料工学的研究 ・メカニカルストレスと骨代謝に関する分子生物学的研究	矯正歯科医学を専門とし、これまで顎顔面の発育成長に関する研究分野において卓越した成果を上げてきた。歯学分野における最大の国際学会である国際歯科研究学会（IADR）の日本部会（JADR）の会長職にあり、分野横断的かつ国際的な活動を推進している。日本矯正歯科学会賞（2022年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	歯学研究領域で現在までに培ってきた経験や知識を活かして、国内外の学術及び社会の動向を的確に把握しながら、科学・技術の発展を広い視野から展望し、異なる専門分野間をつなぐ活動を行うと共に、政府や社会と対話を行なって課題解決に向けて取り組んで参りたいと思います。	第二部
99	森山 美知子	広島大学大学院医系科学研究科教授	健康・生活科学	・Population Health Managementの手法を用いた医療提供システム開発に関する研究 ・慢性疾患/NCDSの疾病管理：プログラム開発に関する研究 ・家族看護学・プライマリ・ケア看護学の開発、発展に関する研究 ・中低所得国における看護ケア・疾病管理の開発に関する研究	看護学を専門とし、これまで慢性病の予防・治療管理・ケアシステム開発に関する国際的研究を推進し卓越した成果を上げる一方、産官学によるヘルスケアシステム開発に取り組み、広島大学発ベンチャー企業を立ち上げその実務責任者として地域健康生成に貢献するなどの活動を行ってきた。ひろしまナイチンゲール賞（2022年）などの受賞歴がある。また、過去に厚生労働省重症化予防（国保・後期広域）ワーキンググループ委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	保健医療分野、特に看護学の専門知識と国内外のネットワークを活用し、人口縮小社会における持続可能な社会保障制度に係る社会課題を中心に、これらのテーマに関連する分科会や委員会活動を通して、日本学術会議の活動に参画して参ります。	第二部
100	安友 康二	徳島大学大学院医歯薬学研究部教授	基礎医学、臨床医学	・遺伝性炎症性疾患の原因遺伝子同定研究 ・感染症に対するT細胞応答の制御機構に関する研究 ・T細胞の運命決定機構に関する研究	免疫学を専門とし、医光融合研究部の部門長として、大学内および大学と産業界の研究を結びつける活動を行うほか、大学の副理事として活躍するなど地方大学の抱える問題についても精通している。日本免疫学会賞（2014年）、文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）（2022年）などの受賞歴がある。また、過去に文部科学省特色ある共同研究拠点の整備の推進事業推進委員会委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	自身の専門領域である免疫学および小児遺伝学だけではなく、他の研究領域においても共通して抱える課題がどのようにすれば解決できるのかについての審議や提案活動に携わりたいと考えています。	第二部

No.	氏名	所属及び職名	専門分野 (30分野)	研究又は業績の内容	選考理由	会員としての抱負	所属する部
101	藪田 ひかる	広島大学大学院先進理工系科学研究科教授	地球惑星科学、化学	・ 始原小天体物質（隕石・彗星塵・小惑星帰還試料など）に含まれる有機化合物の化学分析による、惑星系と生命の起源と進化の解明 ・ 惑星物質サンプルリターン探査の開発に関する研究	宇宙惑星科学を専門とし、これまで地球外物質の有機化学分析による太陽系や惑星・生命の起源・進化の解明を研究し、はやぶさ2の着陸地点選定チーム長や初期分析固体有機物分析チームリーダーとして宇宙理学・工学融合を牽引し、国際アストロバイオロジー学会副会長として、分野横断的な新興分野であるアストロバイオロジー（天体生物学）・コミュニティのまとめ役を担ってきた。日本有機地球化学会若手研究者奨励賞（2007年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	第24・25期は連携会員として地球惑星科学における人材育成と社会貢献のあり方を学びました。今期からは会員として異分野連携、国際連携に積極的に取り組み、科学技術の発展と次世代人材育成に貢献させていただく所存です。また、これからの分野である持続可能な宇宙利用にも力を入れてまいりたいと存じます。	第三部
102	山田 泰広	東京大学大学院医学系研究科分子病理学分野教授	基礎医学	・ 実験病理学 ・ 細胞運命の維持・制御におけるエピゲノム制御に関する研究 ・ 生体内リプログラミング技術による発がん、組織再生および老化形質の制御に関する研究	実験病理学、腫瘍生物学を専門とし、幹細胞や細胞リプログラミングにも造詣が深く、一流学術誌への論文掲載が多い。国際交流も盛んに行なっており国際共著も多数ある。日本学士院学術奨励賞（2017年）、日本学術振興会賞（2017年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	病理学の専門的知識を活用し、健康社会の実現に貢献したい。また、日本学術会議での活動を介して創造的で自律的な教育・研究活動を促進し、少しでも日本の科学の発展に貢献できればと考えています。	第二部
103	柚崎 通介	慶應義塾大学医学部教授	基礎医学	・ シナプス形成・維持・除去を担う分子機構と精神神経疾患への応用 ・ 記憶・学習の基礎過程としてのシナプス可塑性機構 ・ 神経細胞の樹状突起形成機構	神経科学全般を専門とし、これまで海外の民間企業・研究機関等を経験しており、日本神経科学学会の理事長として学協会発展にも尽力してする一方、重い障害を持つ子どもとその家族を支える活動を支えるNPO法人の運営に携わってきた。時實利彦記念賞（2012年）、文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）（2013年）などの受賞歴がある。また、過去に文部科学省大学設置・学校法人審議会専門委員を務めた経験があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	過去に2期連携会員を務め、この間に神経科学分科会（副委員長）や機能医科学分科会（副委員長）を務めました。さまざまな学会や公的活動にも従事してきた経験を活かし、新しい日本学術会議の活動に貢献できればと考えています。	第二部
104	吉澤 誠一郎	東京大学大学院人文社会系研究科教授	史学	・ 近代中国における都市社会の形成、特に行政機構の整備と市民生活との相互関係 ・ 中国近代ナショナリズム運動の歴史的展開およびそれと日本との関係 ・ 日本の史学史におけるアジアの位置づけ、特に「東洋史学」の形成と展開	アジア史（近現代中国史）を専門とし、これまで国際歴史学会議の国内委員会委員長としてその運営に努めてきた。孫中山記念会山口一郎記念賞（2005年）などの受賞歴がある。今後、世界と国内の歴史学界を有効に結び付ける役割などが期待される。また、過去に文部科学省の学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業協力者を務めた経歴があるほか、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	現今、学术界と政府・社会との橋渡しは、ますます緊要なものとなっている。私は、特に、歴史学の学際的な展開をはかり、世界と国内の歴史学界を有効に結びつけること、日本社会のなかで歴史学が有意義な役割を果たせることをめざしたい。	第一部
105	渡辺 京子	玉川大学農学部教授	農学、統合生物学	・ バナナ・カカオの難病害防除の栽培技術体系の確立 ・ 網状進化を背景とした子囊菌類の分類体系の構築 ・ ビワ果実腐敗の病原菌の感染経路の解明	植物病理学を専門とし、これまで菌類病の発病機構や防除法に関する研究で優れた業績をあげるとともに、現場での実務経験やネットワークを活かして、植物検疫、植物病害防除に関連する活動などを行ってきた。植物病原菌類談話会の活動から勝本賞（団体受賞、2013年）などの受賞歴がある。また、日本学術会議連携会員としての活動実績もある。	植物病理学・菌学の基礎研究・実務の経験を活かして食料生産に関連する分科会や委員会、特に植物保護の活動に尽力します。またこれらを基盤とした国際共同研究と技術移転の視点から科学技術協力等の活動に参画してまいります。	第二部